『』の白百合、『』の金盞花

あたりめ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この話はチャンピオンになれなかったあたし『マリィ』と、チャンピオンになってしまった少女『ユウリ』の話である。

※ポケモン剣盾マリィ一人称の原作再構成物です。原作ネタバレあり注意。

※ガールズラブ要素はあったりなかったりします。嫌な予感したらブラバ推奨

目次

『日向』の白百合、『路地裏』の金盞花 ―― 1
『崖上』の白百合、『崖下』の金盞花 ―― 15
『高み』の白百合、『萎びた』金盞花 ―― 31
『窮地』の白百合、『失意』の金盞花 ―― 42
『暗闇』の白百合、『失意』の金盞花 ―― 52
【外伝】
『マホ』の白百合、『決意』の金盞花 ―― 65

『日向』の白百合、『路地裏』の金盞花

『きっかけ』という物は理不尽だ。
それは時、場所、内容、望む望まないに関わらず、急に突き付けてくるからだ。
あまつさえ『きっかけ』という物は気付かぬうちに忍び寄っている。

ふとした行動……そうだね、極論言えば手をブラブラしたり、道端に落ちているものを拾ったりするだけで、簡単な動作でもきっかけを進めてしまうという事だ。ひょっとすると何もしていなくてもガラリと人生が変わってしまう事だってある。
そこには「もしもあんなことをしなかったら」「あの時、別の事をしていれば」なんていうたらればは通用しない。一度出くわし、そして『きっかけ』の先に足を踏み入れたが最後、あたし達はその先にある道を進む他なくなってしまう。
たとえ望んでいたとしても、願ったとしても。
人生をやり直すなんて事は天地がひっくり返っても出来ないという事だ。
楽しい未来も、悲しい未来も表裏一体。
どんな未来が訪れるかは、運とその人の選択次第なのだ。

――この話はチャンピオンになれなかったあたし『マリィ』と、チャンピオンになってしまった少女、『ユウリ』の話である。

§　§　§

『えっと……ネズです。スパイクタウンは残念ながらダイマックスできないのですが、ある意味ポケモン勝負本来の姿でもあるんで、そこをアッピールしたいです』
5年くらい前のこの時の事は今でも鮮明に覚えている。
TVの中のアニキがいつも以上に真面目な口調で、かつ少し震えな

がらアナウンサーに話しかけていたのが凄く特徴的だった。
今と比べればファッション性なんて欠片もなく、どこにでもいそうな背伸びしてオシャレした一青年で、見目が立ってる訳でもなく、お世辞にも格好いいとは言えないトレーナー。でもあたしはそんなアニキを見て大いに泣いていた。
嬉しくて、嬉しくて、ぼろぼろ涙を流して泣いていた。
それは街中の人も同じであった。
小さく狭い料理店の中にぎゅうぎゅうになる程みんなで集まって、壁に備え付けられたモニタを眺めて、あたし達の街（スパイクタウン）から初めて出たジムリーダーの誕生を祝っていた。
アニキ。心優しいアニキ。
この寂れた町と歌をこよなく愛する、真面目だけど少し捻（ひね）くれてるアニキ。
あたし達はそんなアニキがこの街のため、そして自分達のために日々どれだけの汗をかき、どれだけの涙を流して特訓をしていたかを知っている。
だからこそ、アニキの努力が実を結んだのが瞬間が見れたのが心の底から嬉しくて、誇らしくて。そして頑張った自分ではなく私達の街の事をアピールしてくれたいじらしさが、何よりも格好いいと思えたものだった。
『あと妹がいて……おれより素質があるんですけど、彼女が大きくなってジムリーダーになるまでは、歌ったりしながらみんなで街を盛り上げていきます！』
……しぇからしか。
今はアニキが主役でしょ、なのになんでアタシの話を出すのさ。
いいから今はただただアニキを祝えばいいものを、周りのみんなもアニキのコメントに共感するように「そうだぞ！」「応援してるぞお嬢！」なんて声ばかけてきたけどさ、流石に気が早すぎるよね。
――でも。あたしはその時、思ったんだ。
他でもないアニキが認めてくれたのなら、本当に私もなれるのかなって。

自信も実力もない、泣き虫なあたしでも。
アニキのような格好いいジムリーダーになれるのかなって。
「……ね、モルペコ。あたしでもなれるかな？」
「うら？」
丁度この頃、アニキがくれたあたし初めてのポケモン……膝の上の相棒（モルペコ）は不思議そうにあたしば見つめてきたけど、数瞬の後に満面の笑みを見せてくれたものだった。
「うらら！」
「うん……うん。ありがとうね」
あたしはモルペコをちょっと強めに抱きしめながら、その時誓ったんだ。
いつかこの街のジムリーダーに。
ううん。アニキを超えるトレーナーになってみせるって。
これがあたしの人生で初めての大きな転機。

――そして、今。

「キョロキョロしちゃって」
「え？」
エンジンシティ。ジムチャレンジ開催直前。
意欲を燃やす挑戦者達がひしめきあう中で一際挙動不審な少女とあたしは出会った。
腰に二個のモンスターボールをひっさげ、ぽややんとした、恐らく同年代のその子は、真新しいジムセンターに似つかわぬ……なんて言うたらよかと？　田舎く……じゃない、純朴さが目に見えていた。
「あんた田舎から来たんでしょ、だってあたしもそうだし」
「……うえっ!?　わ、私そんなにキョロキョロしてました……？」
「うん。大分ね。傍目でもおのぼりさんだーって分かるくらいには」
「うぅ……っ！」
……今思えば失礼極まりない発言だと思う。
お互い田舎同士だとしたらなおさら上から目線の発言なんて出来

やしないというのに……多分、あたしも緊張してたんだろうな。
　そんな子に声をかけてしまったのは、自分よりも駆け出しも駆け出しといった如何にもな風体、その雰囲気に共感できるモノがあったのと、自らを落ち着かせるためだったのかも。
「あはは、ちょ、ちょっと舞い上がりすぎてたかも……」
「そげんことなかばい。誰だってここ来るの初めてならそんなもんでしょ」
「そげ……実は二回目なんだけどね、それもずっと前に親と来ただけだけど」
　その子はあたしの指摘に気を悪くする事もなく、ただ慌て、恥ずかしそうにしてたけど、やがて照れくさそうに頭ばかいて微笑み、見た目以上の純朴さを見せ付けてきた。
　この時点であたしはこの子の事が気に入りかけていたけど……その反面、今後この子と会うことは無いのかもしれない、なんて侮りを胸に抱いていた。
「勝手に話しかけてゴメンね。それじゃ、お互い頑張ろうよ」
「う、うんっ……ありがとう。そっちこそねっ」

　――これがあたしの人生で二度目に大きな転機。
『ユウリ』という少女との初めての出会いであった。

§　§　§

　私達の住まう土地、ガラル地方。
　ここでは一年に一回行われる、若手から経験豊富なトレーナーが参加する、『ジムチャレンジ』――８人のジムリーダーを倒し、そして現チャンピオンを打倒することを目指す――という催しが開かれ、例に漏れずあたしはこの競技に参加していた。
　ジムチャレンジに参加するのはあたしの子供の頃からの夢。
　地元スパイクタウンでアニキや街の人達と何度も何度も訓練を積んで、ようやくアニキから参加権となる推薦状を貰う事が出来たの

だ。
開催地となるエンジンシティに立っているのだと考えると……夢のための一歩をようやく踏み出す事が出来たのだと思うと、どうしても高ぶる心を抑えられなかった。
くだんの『ユウリ』と出会ったのは開催式直後のことだ。
その時は長い付き合いになるとは到底考えておらず（当たり前か）また、その場を別れたあたしだけど、ユウリとの再開は意外にもそのすぐ後の事だった。
ジムチャレンジャーとして登録し、宿泊先に指定されたスボミーインで休もうとした矢先……ホテルロビーに先ほどの女の子（と男の子）を見かけた。
……まあ見かけたのはその子らだけでなくてうちのエール団（地元の応援団）もやけど。
なんでロビーでポケモンバトルするハメになるん。なんで選手達の宿泊ば邪魔しとるん。理由は大体あたしの為だってのはわかっとるけど……熱くなりすぎ。ルールを守って勝ち抜かないと意味ないじゃん。
「「マリィ!?　いや、あの、ちょっと……」」
「「……マリィ？」」
「あんたたちがジムチャレンジャーを気にするのはわかるけど、ちょっとばかり手荒すぎるって」
ほら帰って帰って！　って言ってやったらみんな見て分かるほどしゅんとして下がっていった。
ジグザグマより分かりやすい凹み様やね……みんな悪い人じゃないし、気持ちは嬉しいけど、こればかりはね。
「あたしの応援に夢中で他のジムチャレンジャーにはとげとげしい態度になってるの。不愉快な思いさせたらゴメンね」
「え、あ、ううん！　大丈夫だよ、気にしてない！」
あたしが謝罪しても女の子は気にしてないと言わんばかりに頭を振っていた。
さっきのぽややんとした感じはそのままだけど、エール団の二人を

事もなく倒せるその実力はちょっぴり見直した。なかなかやるじゃん。
「オマエもジムチャレンジャーか！　エール団だっけ？　さっそくファンがいるなんてすごいぞ！」
その子と同行してるウールーみたいなもこもこ天パの男の子が言ってきたけど、あたしは苦笑いしか出来ない。だってファンというよりかは、親戚みたいな身内だもん。
それにしても、二人は幼馴染かなんかなのかな？
さっきのダブルバトルも息があってたし、中々いいコンビなのかもね。
でもね、如何に二人がいいコンビだろうとあたしには負けられない理由がある。
「いよいよジムチャレンジね……悪いけど勝つのはあたしだから」
あたしがそう啖呵を切ると、二人は臆すことなく力強く頷き返してくれた。
うん。そうこなくっちゃね。

――その後も、私とその二人組はちょくちょく顔を合わせた。

時は少し過ぎ、草タイプのヤローさん、水タイプのルリナさんと2つのジムトレーナー戦を経て、いずれのジムバッジも勝ち取ったあたしは、いよいよ最初の関門とも言われる炎タイプのジムリーダー、カブさんを相手取る形となった。
カブさんの拠点であるエンジンシティに辿りつき、スボミーインで食事とお風呂を頂いた後、まだ時間もあるし散歩でもしようかな、なんてロビーでうろついていたら、ばったりと件（くだん）の彼女にあった。
「えーっとユウリ選手だっけ、おそくまでがんばっとーねー」
「え？　あ。あの時の――」
おぼろげだったけど、どうやら名前はあってたみたいだ。
隣にいたウールー髪の子が「ユウリ、ユウリ」って楽しげに話しかけてたからね。

「――マリィちゃん！」
「……うちの名前覚えとーと？」
「うん。えっと、エール団、だっけ？　あの人達がそう言ってたから……」
……まあうん。覚えるよねそれは。
迷惑集団の長みたいなもんだし、嫌な感じのイメージがついちゃったかなぁ。
なんて思ってたら顔に出てしまったのか、慌ててその子は訂正してきた。
「あ、べ、別にあの時のことは全然根に持ってないからね!?　むしろ、マリィちゃんは応援団がついちゃうくらい可愛いってのはよく分かるし……」
「そ？　ありがとね」
いつも耳がタコになるほど地元では言われてきたけど、邪気のない表情で言われると悪い気はしないかな。
だからだろうか、本当はこの時は他愛もない話で終わらせるつもりだったけど……なんだろう、ふと魔がさしたと言うか興が乗ったというか……この子と無性に戦ってみたくなったのだ。
「そうだ。あんたちょいと付きあってよ。あたしがジムチャレンジで勝てるか試しておきたいし」
「ええっ？」
嘘だ。本当はこの子よりあたしの方が強いって事を確認したくて戦いを仕掛けたに過ぎない。
夜遅く、それもホテルロビーでお願いするなんて、あたしもエール団の事を言えないくらい行儀が悪かんね……だけど、
「うん。望む所だよマリィちゃん！」
「おぉ！　やる気やなぁ！」
だけど、この子は戦いを快諾してくれた。
その表情は何よりもあたしとの対戦、いやポケモンと一緒に戦える事にワクワクしているように思えた。ま、折角乗ってくれたっていうなら、この機会をありがたく活かさないとね。

「負けると不機嫌になるからね……ま、あたしが負ける訳ないけど！」
「えぇっ……う、うーんでもこっちこそ負けないからね！」
腰につがえたポケモンボールを手に、私はユウリと初めての勝負に挑んだ！
……。
……。
…。
「やったぁ！　お疲れ様ひばひばー！」
「きゃーうっ♪」
結論から言えば……あたしは負けてしまった。
途中まではあたしが場を制していたと思う、だけど彼女のひばひば……ヒバニーが出たと思ったらあっという間にあたしのポケモン達を蹴散らし、一番の相棒のモルペコも一撃を与える事は出来ても逆転することは叶わなかった。
「マリィに勝つなんて……あんたちょっとはやるじゃん」
「えへへ……ありがとうねマリィちゃん、こっちもちょっとハラハラしちゃった」
この時以上に自身の表情が乏（とぼ）しい事をありがたいと思った事はなかった。
格の差を見せつけるつもりで挑んだのに、蓋を返せば接戦とも言えない大敗……なんてザマなのだろうか。悔しさに少し拳を握りしめながらも、あたしは顔色に出ないように努める他なく。
「あの」
「明日に備えて寝るか……じゃああんたもお休み」
「うらら！」
ユウリは対戦に勝てた事が嬉しいのか話かけようとしたけれども、今のあたしに返事をする余裕はない。唯一出来た事は、何でもないのだと装いながらも足早にその場を去る事だけだった。本当、格好悪いし……最悪だね。あたし。
「……うらら」
「……ごめんねモルペコ、みんな。全部あたしが油断してたせいだ」

モルペコもシュンとしてるけど、モルペコは悪くない。悪いのは油断してたあたしだ。みくびった結果負けるなんて……一番サイテーな結果だ。アニキもあたしを叱るだろうな。
あたしはそのまま部屋に出戻ると、着の身着のままベッドにポスンと飛び込み、早くこの嫌な気持ちが退いてくれる事を祈り続けたのだった。

その翌朝。あたしはホテルのロビーで相手を待っていた。
お目当ては昨日あたしを打ち負かした『ユウリ』という女の子だった。
「おはよ」
「あれ、マリィちゃん？　おはよう」
ユウリは明らかに声ばかけてきたあたしを不思議に思っているようだった。
まあ……そりゃそうだよね。でも昨日の今日で再戦なんて言うつもりはないから安心して。ただ単にあんたに用事が出来ただけだからさ。
「あんたの友達、もうジムチャレンジに行ったよ。カブさんのリーグカードでばっちり対策したとか言ってさ」
「ホ、ホップったら……ごめんね、わざわざそれを伝えに？」
「それもあるけど、一番はコレ。なんか沢山くれたからあんたにも分けてあげるよ」
「わ、と、カブさんのリーグカード？　こんなに？」
「うん。あたしもびっくりしたよ」
そのホップとやらはユウリと同じ快活な少年ではあるが、何というかユウリよりも猪突猛進で思い立ったらすぐ行動っていう熱血漢。会って二度目だと言うのにホテルであたしと目が合った瞬間、色々捲(まく)し立てた挙げ句あたしにもリーグカードをくれたのだ。全部同じだし、一枚でいいのにねぇ……。
「なんか、その色々迷惑かけてごめんね……」
……疲れた表情ばしとる。日頃から振り回されとるんやろーねー。

「ううん。あたしも昨日いきなり勝負仕掛けちゃったし、こっちこそごめん。そう言えば二人は幼馴染なんだっけ？」
「そんなそんな！　いい経験になったよ、ありがとね！　……うん、お隣さん。昔っからホップはダンデさん……チャンピオンに憧れてて、それであたしも一緒に～ってほとんど強引に誘われちゃって……」
「へぇ。じゃあジムチャレンジもその子がきっかけで？」
「そうだよ～。最初はチャンピオンとか別にそんなに、って感じだったけど……ポケモン達と一緒に過ごしたり、触れ合ったり、あと一緒に旅をしていったら楽しくて楽しくて……」
　うん。本当にイキイキしとるね。
　話を聞くにヒバニーとはまだ出会って間もないのに息もぴったりだったし、あたしを負かす実力もある。何だかんだで警戒しなきゃ駄目かもね……。
「あ、そうそう……昨夜の勝負のお礼」
「やけどなおし……いいのマリィちゃん？」
「敵に塩を送られるんはいい気分がしない？」
「て、敵って……そんな事はないよ、嬉しいよ！」
「あはは。ま、そう気構えないでよ。ただのお礼だからさ」
　敵と言われておろおろしてるユウリば見ると、何だか拗ねてたあたしが馬鹿らしく思えてきて、自然と昨日のわだかまりは無くなっていた。
「あたしに打ち勝つ実力もあるんだし、あんたなら燃える男、カブさんにも勝てるんじゃない？」
「……うん。勝ってみせるよ！　ありがとうマリィちゃん！」
　この笑顔、やる気に満ちあふれて眩しいくらいだ。
　この時点であたしは間違いなくこの子がジムチャレンジを勝ち続けるのだと本能的に悟っていた。……だったらあたしもこの子に負けなくらい実力をつけて、次こそは一糸報いてやらんとね。
「うら！」
　主人のやる気を感じ取ったモルペコが元気よく返事をしたのを皮切りに、あたしも先のジムへと急ぐのだった。

……それにしても、マリィちゃんは恥ずかしか。
次会う機会があるなら呼び方を変えて貰おうか、うん。

§　§　§

次にユウリに会ったのはアラベスクタウン。
大樹をくりぬいた場所に作ったと言われる、なんかファンシーな場所だった。
ここのジムは今までのジムバトルとは違って……何だろう、凄い個性的だった。
何というかチャレンジっていうか面接っていうか……？　ジムリーダー後継者のオーディションも兼ねてた感じだった。
ジムリーダーであるポプラさんっていうお婆さんにはどうにか勝てたけど、『ピンクが少し足りないね、チャレンジは合格。オーディションは残念だけど不合格だよ』って言われて、折角の勝利もなんだか釈然としぇんかった……。
それでもどうにかして仲間たちと５つ目のバッジを手に入れたんだ。浮かれるのも程々に次のタウンに進もうとした――その矢先。
あたしはまたもユウリと出会えた。
「おっ、ユウリ選手」
「あ、マリィちゃん！」
何だかんだでいつか会えるとは思ってたけど、存外早い遭遇だ。
あたしを見つけたユウリは嬉しそうにこちらに近づいてきた。
「ジムチャレンジしてきた所？　どうだった？」
「何でんなか。当然勝って来た所だよ。個性的なジムやった……」
「流石マリィちゃん……！」
「そういうそっちこそ、ここまで来たってことはジムバッジ４コでしょ？　あんた要注意だね」
「そんなそんな～、警戒するほどじゃないよ～」
なんて照れながらも謙遜（けんそん）するユウリだけど、そこに自惚れなんて

微塵(みじん)も感じられず本当に心の底からそう思っているようだ。
「そう？　ほらモルペコだって警戒してる……ってモルペコ、あんたもしかしてユウリを気にいっちゃった？　もう！　ジムチャレンジャー同士真剣に戦うこともあるのに」
「うらら♪」
「モルペコ本当？　えへへ、嬉しいな。仲良くしようね～」
「ユウリ、あんたもあんまりうちの子と……まあ、もう、いいけどさ……」
　かなり珍しい事だと思う。モルペコはあの愛嬌たっぷりの表情と裏腹にかなり人見知りするのに、数回会っただけのユウリにあれだけ懐くなんて。
　視線を合わせるようにしゃがんで、小さなお手々を取りあって楽しげにしてる様子ば見るとモルペコだけでなくあたしもどんどん毒気が抜かれてく気がしてならなかった。
　……この子、リラックス出来て、自然に触れ合えるような空気を作るんが上手いからこそ、短期間でポケモン達とあんなに息のあったプレイが出来るのかもしれんね。
「ほら、もうおしまいだよモルペコ、ユウリ。言っとくけどあたしを負かせた事は忘れとらんけんね」
「あ、あはははは……ごめんなさいマリィちゃん」
「謝らんでよか、あん時はあたしが油断してたせいだもん。……ま、今ではそう簡単に倒せるなんて思って欲しくないけどさ。あたしもみんなもいーっぱい特訓したんだからね」
「……！　うん。私達も、あの時より格段に強くなってるからね！」
「知ってる。デイリーガラルでも放映されとったけん。なー？　ダンデさん推薦のチャレンジャーさん？」
　デイリーガラルはガラル地方の国営放送だ。
　ジムチャレンジの時期は毎日状況や様々な見どころあるトレーナーを紹介してくれるんだけど……まさか、ね。この子とあのホップって子がチャンピオン直々の推薦を受けてたなんて、思いもしてなかった。

「う。そ、そんな大層なプレイヤーでもないよぉ……たまたま推薦してくれた人がダンデさんなだけで……！」
「どーだか。でもユウリも、ホップって子もダンデさんの目に狂いはなさそうじゃん？」
「っ、私はともかくホップは……うん。あの子なら間違いなく勝ち進むよ！　きっと！」
「そこで何で自分を推さないのさ。自信があるのかないのか、さっぱり分からないよ」
「あははは……」
　うん……？　今ホップって子の名前を出した途端、なんだか妙な間があったように感じたけど……何か喧嘩でもしたんだろうか……まあいいか。
「仕方ないなぁ……あたしのリーグカードあげておくか」
「え!?　いいの!?」
「いいのも何も、あたし達なら遅かれ早かれ交換する事になるでしょ。だって、あたしは、あんたの事はもうライバルって認めてるからね」
　恐らく……いや、確実にあたし達はトーナメントの場で再び出逢うのだろう。
　あたしにはとにかく負けられない理由がある。
　前回のような無様な真似は決して見せられない、見せたくない。
　このリーグカードの意味は自ら全てを晒した上で勝ちたいという宣戦布告に他ならなかった。
「……マリィちゃん」
　その時、あいつはほんの少しだけ迷ったかのように、どこか思いつめた表情を見せたけど……すぐに何かを振り払うかのように顔を振って、応えてくれた。
「ん、ごめんね。……じゃあマリィちゃん、これが私のリーグカードだよ」
　あいつはにっこり笑顔。あたしは恐らく小さく微笑みを見せてカードを交換しあう。
　……うん。これであたし達はもう逃げられない。お互いに死力を

尽くす他なくなったね。
「数少ないジムチャレンジャーの生き残りだもんな。絶対決勝に進もうよ」
「分かったよマリィ、そうなったら私も絶対に決勝まで進めるように強くなって見せる！」
あいつの宣言はあたしの心に良く響いて、もっと頑張ろうという気持ちにさせてくれた。
あたしはその言葉を胸に噛み締めてジムを後にするのだった。

思えばこの時。あたしは狂い始めていた『ユウリ』の人生に、大きな楔（くさび）を残してしまったのだろうと、今だからこそ思う。
あたしという『きっかけ』で、ユウリはもう目の前の道を進むしかなくなっていたのだ。

『崖上』の白百合、『崖下』の金盞花

「ふぅ……お疲れ様モルペコ。ズルズキン。そろそろ休憩にしよっか」
「うらら！」
「ギュウア！」
ワイルドエリア。
それは野生ポケモン達がのびのびと暮らす原生環境。
小さいながらも平原から砂漠まで様々な環境がそこには繰り広げられており、天候も激しく移ろい行く、ポケモンにとっても人間にとっても厳しい場所である。
私達ジムチャレンジャーはトレーナー達と鎬（しのぎ）を競い合うだけでなく、必然的にワイルドエリアに篭（こも）って特訓をする必要が出てくる。
何せここに出てくる野生ポケモン達はどれもが厳しい環境で生き抜いてきた一品揃い。歴戦のトレーナーでさえ気を抜けば手塩にかけて育てたポケモン達でも負けることがあるし、また絶対に太刀打ちできないポケモンでさえ気軽に現れる。ここはトレーナーのセンスを磨くには抜群に適した場所なのだ。
時刻は既に夕方になりつつあった。
あたしはジムリーダーであるアニキとの戦いに備えて朝からワイルドエリアに来ていたけれども……気がついたらもうこんな時間だ。ちょっと頑張りすぎちゃったかも。
太陽が完全に降りきる前に何とか野営の準備を済ませないと……特訓で疲れ果てているポケモン達をボールにしまいこみ（モルペコは別。いつも外に出して同行させてる）、キャンプに適した場所を探していったのだが、
「……うわぁっ、と!?」
「うらっ!?」
「ぼふ？」
不運にも唐突に草むらから現れたキテルグマに自転車ごと衝突してしまい、あたしはモルペコごと地面に投げ出されてしまう。キテル

グマのぬいぐるみみたいにもふもふな体のお陰で怪我自体はないけれども……完全に目をつけられてしまった。これは、まずい。
このキテルグマ。見た目の愛嬌とは打って代わってかなり凶暴なのだ。
キテルグマは仲間や相手と抱き合う癖があるのだが、その力は余りにも強く。キテルグマに抱きしめられて背骨を折られて命を落とすトレーナーも少なくない。
しかも今相対している相手はかなり強い個体のようだ……あたしを庇うように間に立ったモルペコが『はらぺこモヨウ』の顔を見せて警戒している。そこにいつもの余裕は見受けられない。
ピッピ人形は既に使い切った後。
手持ちのポケモン達は疲弊しきっている。
何とかして、何とかして逃げないと……！
「モルペコ……全力のオーラぐるまを顔に叩き込んだらすぐに離脱するよ。出来る？」
「うらっ！」
モルペコの頬袋の周りに紫電が飛び散り始める。
そんなモルペコの威嚇もなんのその、のそり、のそりと近付いてくるキテルグマ。
全長２ｍを超えるその体長から感じられる威圧感は余りにも強く。あたしは震えそうになる膝を何とか留めながらも命令を出そうとした――その時だった。
「――きりきり、『エアスラッシュ』！」
「グマッ!?」
横合いから唐突に現れた一つの影がすれ違ったかと思えばキテルグマに大きな傷を与えたのだ。
横槍を入れられたキテルグマは不意を突かれて苦しそうに顔を歪める。すぐに新たな敵を迎え撃とうとするが今の一撃は軽いものではなく、ついたたらを踏んでしまう――つまり、はっきりとした隙が出来てしまう！

「今だよモルペコっ、オーラぐるま！」
「うらぁっ！」
「ぐままっ」
横を向いた瞬間にモルペコのオーラぐるまがほとばしり、キテルグマが紫電に包まれる。
大ダメージとまでは言わないが少しのダメージにはなったようで、キテルグマは怒りに我武者羅に両腕を振り回し始める。
「これで最後！『かわらわり』！」
「ザキッ！」
「ぐまぁぁ……っ！」
しかし乱入したキリキザンはその鋭利な両腕を掲げて飛び上がると、隙だらけのキテルグマに上から強襲。背中を大きく切り裂かれたキテルグマは耐えきれず、その巨体を地面に沈めるのだった。
「はぁぁ～……あ、危ない所だったね、マリィちゃん」
そして唐突な乱入者は案の定……あたしのライバルであるユウリであった。
「ユウリ、あんたどうして……ううん。ここはまずはありがとうだね」
「どういたしまして。と言っても本当偶然なんだけどね。ほら私のキャンプは実はあそこで」
「……ほんとやね」
この子が指差した目と鼻の先、丁度大樹の根元にユウリはキャンプを立てていたようだ。
不幸中の幸いというか、丁度そこにいたのがユウリのような実力者である事に、あたしは胸を撫で下ろすのだった。
「この子は当然あんたのだよね。ありがとうキリキザン、助かったよ」
「キザッ」
ユウリの隣に、まるで騎士のように佇むキリキザンは恭しく頭を下げて返礼を返すが、直後ユウリに頭をぺしり、と叩かれていた。
「きりきり？　確かに助かったけど格好つけるのは駄目だって言ったよね？　最後のジャンプとか特に必要ないでしょ？」
「キザっ、キザキザ」

「騎士ならば魅せなければ……？　魅せるよりも倒す方が先だよ。あれでもしも助け切れなくてマリィやモルペコが傷つく事になったらどうするつもり？」
「キザ……」
「反省してる？　……なら許してあげる。次からは気をつけようねきりきり。よく頑張ったねっ」
「キザ！」
しゅんとしたキリキザンに対して、ユウリはその硬い頭をよしよしと撫でて褒め。キリキザンは心なし嬉しそうに目を閉じて撫でられ続けていた。
……あたしがこの一幕を見て思ったことは２つ。
この子が厳しい一面を見せるのが意外だったという事と。
あたしとユウリの実力に、大きな開きが出来ているのではないか、という事だ。
あたしは自らの実力にそこそこの自信を持っていたが、あのかなり強い筈のキテルグマを冷静に、そしてほぼ１匹のポケモンだけで制する事が出来るトレーナーがどれだけいるというのだろうか。それこそジムリーダークラスの実力がなければ余裕を持って撃退することも難しい筈だ。
出会ってまだ数ヶ月しか経ってないというのに――この子は、この子はどこまで強くなって、
「それで、マリィちゃんもここで特訓してたの？」
「――え……？　あっ、う、うん。そうだよ。アニキと戦う前の最終調整」
「アニキ……そうか、ネズさんの妹さんだもんね」
「うん。本当ならもうさっさと挑戦しようかなって思っとーけど……まだアニキを倒せるほど強くなってるかはちょっと自信なくてね。そういうあんたはもうアニキには挑戦した？」
「本当は行くつもりだったけど……何でか知らないけどスパイクタウンに入れないから、ちょっと待ち状態」
「スパイクタウンに？」

なんでんか知らないけど、あたしのホームのシャッターが閉まっていてジム戦に挑戦が出来ないらしい。何でそげん事になったんやろう……。
「まあでも丁度いいかなって思って、今は休憩中」
「休憩……ワイルドエリアで？」
「えへへ、私ワイルドエリアが好きでねー、落ち着く場所だからいつも休憩がてらここに来てるんだ」
多種多様なポケモン達と出会えるとは言え、危険と隣り合わせのこの場所でリラックスはなかなか出来ないように思えるけど彼女は違うらしい。
ユウリは気付けば構って欲しそうに足元に忍び寄った6匹のタイレーツ（多分ユウリのポケモン）に気付き、そのうちの一匹を抱えあげる。残りの5匹は羨ましそうに下で飛び跳ね、腕の中の一匹は嬉しそうにその丸い体をユウリに擦り付けとった。
「色んなポケモンがのびのびと生きていて、身近に感じられて、しかも触れ合える。彼らが周りのポケモン達と楽しそうに、時に喧嘩したりと自然に生きてる様子を見れるのが私、何よりも好きなんだ」
「懐いてないポケモンがいるけん、もしかしたら怪我をするかもしれないよ」
「そうだね、でもそれは触れ合い方を間違えていたらの場合。接し方さえ間違えなければそうそう怪我なんてしないし……逆に、どんな子とも仲良くなれると私は思っているよ」
それにもしもの事があってもたいたい達がいるもんね、なんてユウリが語りかければ、腕と足の周りに居るタイレーツ達全員がキリっとした表情を見せて小さな槍を構えて雄叫びば上げよった。
ユウリの語る事は正しいかもしれんけど……その接し方を知ってる人がどれだけ居る事やろう。極論言えばポケモン一匹一匹で接し方は違う筈なのに。
でもそんな荒唐無稽な事でさえ、目の前にいるユウリならば何となしにできそうだ、と思ってしまう。
「それに……ここに居ると余計な事を考えなくて済むしね」

「？」
「あ、ううん。何でもない……あ、そうだ！　マリィちゃん折角だし良かったら私のキャンプにこない？」
「え？　……うーん、でも」
「今からキャンプ設営するのも大変でしょ？　それにモルペコも疲れてそうだし。ねっ、ねっ？」
「……うーん」
……それであれば、ちょっとくらいお邪魔させて貰おうかな。
あたしがためらいがちに頷けば、ユウリはにっこり笑顔で迎え入れてくれた。
なんなん。こっ恥ずかしか。
「紹介するよ！　うちの子達だよ～！　ひばひば！　きりきり！　たいたい！　いえいえ！　ぱちぱち！　ろぜろぜ！　ほらほらみんな挨拶挨拶っ」
えっと。左からエースバーン、キリキザン、タイレーツ、イエッサン、パルスワンに、ロズレイド……やね。みんな個性的な名前しとる。
樹上で遊んどったエースバーンは枝上から快活そうにこっちに笑いかけ、キリキザンが騎士らしくユウリん後ろでキリっと佇まい、同じくイエッサン♂が執事らしく後ろで瀟洒（しょうしゃ）に礼をしとる。タイレーツは相変わらず抱かれとる一匹だけ礼をし、残りが早く変われと抗議を繰り返し、パルスワンは「イヌヌワン！」と舌を垂らして何度か吠えよった。……ロズレイドは、あ、キャンプの横に隠れておった。恥ずかしがり屋なんね。
「ありがと。ほらみんな、こっちも挨拶だよ」
同じくあたしが連れていたレパルダス、ドグロッグ、ズルズキン、モルペコを開放し、キャンプ場でお披露目。改めてお互いのポケモン達と顔を合わせる事になった。
最初こそお互いギスギスしていたけど、エースバーン……ひばひばとうちのモルペコがどうにかみんなを取りなし、すぐに皆で遊べるような仲になっとった。うん。よかったよかった。
「みんな仲良く遊べてるようだね。ほら取っておいで」

「そうだね。エースバ……ひばひばが取りなしてくれたお陰」
「そっちのモルペコこそだよ～、しっかりみんなに仲良くなってって言ってくれたみたい」
「あの子は外行きの顔が良いの。多分これからのご褒美目当てだと思うよ」
「あははは、うちのひばひばは単純にかけっこ勝負で一番になりたいっていう動機があるみたいだけどね～」
あたし達は思い思いに遊ぶポケモン達を眺めたりじゃらしたりしながら何でもない会話をしていく。
お互いの出身地の事。ファッションの事。食事の事。好きなポケモンの事。
あたしが知ってる事、ユウリが知ってる事。二人が知らない事を話し合った。
同年代の友達なんていなかったし、あたし口下手だから会話なんて盛り上がらないだろうな、って思ったのに……予想を越えて私達は話に花を咲かせ続ける事が出来ていた。
話に夢中になって、気付けば太陽は西の空へと消えかけ。辺りは美しい茜色から薄暗い黄昏の色へと代わりつつあった。
「……あれっ、もうこんな時間!?　ちょっと話したつもりだったのに」
「本当や……それじゃ長居しちゃったね、あたしはこれくらいでお暇を」
「えっ、あ……ま、待って、待ってマリィちゃん。折角だからもうちょっとだけ、ね？　ポケモン達もみんな仲良くなった事だし、遊び足りなさそうだし」
「もうちょっとだけって……もう夜になっちゃうし」
「そ、そう夜だよ。夕飯の時間だよ！　折角だからカレーはどう？　みんなもお腹空いたでしょ？」
「うーん。あたしはちょっと具材切らしてたからなぁ……」
「具材出すよ！　全然出す！　なんなら木の実だって全部出すよー！」
いや、まあこっちは大して用事もないしいいけど……何でそんなに

呼び止めるん。
流石にこれ以上お邪魔するのもあれだし……なんて思っていたけれども、ユウリの目を見たらすぐに分かった。
キラキラと輝いとる。
まるで構って欲しい子犬の目そのものやった。
恐らく、と言うより間違いなくもっとあたしに居て欲しいのだと言うのがありありと分かってしまうと、どうにも断り辛くなってしまい……結局その提案に乗る事になった。
「ありがとうマリィちゃん！　よーしみんなカレーだよ、カレーの時間だよー！　今日は二人で作るからね！」
「はぁ……仕方なか。まあ作るって決めた以上美味しいもん作る他なかね」
テンションの高いユウリに釣られるように、あたしも調理器具を用意しだすのだけれども……何かおかしかね。あたしのポケモン達はみんな大喜びなのに、ユウリのポケモン達は逆に引きつった顔しとる。
違和感を覚えながらも焚き火の用意をポケモンにお願いし、あたし達は具材を切り分けたりして行く。
今日のカレーはオーソドックスなヴルストカレー。パックのソーセージを茹でて入れるだけで簡単な筈、なん、だ、け、ど。
「ユウリ!?　なしてカゴの実をそんなに入れとーと!?」
「え、だって余ってるし……形が可愛いよね」
「可愛さで選ぶんじゃなか！」
あろうことか隠し味目的の木の実に、しぶーいカゴの実をどっさり入れようとしたり。
「ふんぬぬぬぬぬぬ……!!」
「うちわで扇ぎすぎ！　あぁもう焦げとる焦げとる!?」
焼ければいいと思っているのかキャンプファイヤーと見紛う程火力を出そうとして、カレーの色を茶色から黒へと変えようとしたり。
「混ぜすぎ、混ぜすぎだって！　カレーは洗濯機じゃなか!?」
「ま、混ぜれば混ぜるほど美味しいってママが……！　ぬぁあぁぁ

あぁっ……！」
「限度があると！」
　それこそ中身を溢れさせんばかりにカレーを混ぜ合わせて周りに全ての中身を撒き散らさんとする……などなど。ユウリは枚挙に暇のない致命的な料理スキルをあたし達に披露し続けた。
　それはユウリ達のポケモンがあんな顔をするんもよく分かるったい。
　ユウリの料理があんまりにも酷いんで最終的にあたしは「隣で見てるだけでいいから」とアイツに最後通牒を手渡し、一人で料理をすることにしたのだった。
「……うん、いい感じだね。ユウリ、ほら最後の仕上げだよ。いつまでもしょげとらんで、まごころばこめんしゃい」
「うぅ、まごころぉ……」
「ほら！　そこもちゃんと心ばこめんと、折角作ったのに美味しくなる事なか！」
「は、はいぃ……っ！」
　うちが煮立てたカレーを混ぜてる間、ユウリはまごころば込めようとしとったけど、なってなか。あまりにももといので何度かやり直しにしたった。
「よし。それじゃあ盛り付けやね、みんなお皿持って用意しな」
「は、はい先生！」
「うらら！」「ぎゅるるい！」「みゃーう♪」「ぎゃーう！」「キザ！」
　うん、良い返事なんは良いことだけど。なして先生なん？
　そうこうして出来上がったカレーは若干苦味の効いたヴルストカレー。そのお味は……うーん、マホミル級。まあまあやね。
　うちの子達は朝昼頑張って特訓してたけん、いつものように美味しそうに食べよったけど。。
　ユウリの子達は……うわっ!?　なんでみんな泣いてるん!?
「ぎゃうぅ……」
「ぬわん……っ」「キザッ、キザ……！」
　その子らは幸せそうにカレーを頬張り、仲間たちと涙を流し、笑い

合っていた。
　それはようやく、ようやくまっとうな食べ物にありつけたと言わんばかりの表情で、あたしのポケモン達はその子らを見て困惑の表情を見せていたのが印象的だった。
　そして、件のユウリといえば……。
「お、おいひい……おいひいよマリィちゃん……っ！　う、うめ……うめっ」
「あ……う、うん。それはよかったね」
　何か人に見せられない酷い顔をしていた。
　う、うん。とりあえずハンカチ貸してあげよっか？
「カレーって、カレーってこんなにまろやかだったんだ……！　カレーってこんなに奥深い味するんだ……！　一口食べるだけで次が食べたくなって、う、うぅぅっ……お、お代わりいい!?」
「あんたの食材なんだから好きにすればよか……」
「ありがとう！　ありがとうマリィちゃん～～～っ、あ～～～っ、幸せ～～～っ♪♪」

……きっと、この子はドガース級の出来前のカレーしか作れんかったんやろうね。
　あたしと、あたし達のユウリ達へ向ける視線は自然と生暖かいものに変わっていったのだった。

§　§　§

　その後。先程までの天候は皆でカレーをたいらげた直後にカラリ、と代わり。
　分厚い雲が月を覆い隠して、ぱらぱらと雨を降らせ初めてきた。
　あたしはまたもユウリの強い勧めでキャンプで寝泊まりばさせてもらう事になり、
　あまり広くないテントの中で生地に当たる雨粒の音を聞きながら、ランタンの灯りを頼りに二人で話しあいの続きをしていた。

「それにしてもスパイクタウンに入れんのは変な話しやね」
「うん……何か催(もよお)しがあったり、工事をしてる訳じゃあないんだよね？」
「少なくともジムチャレンジ期間の間は工事なんて入ってる訳はないと思ってる。だってそうじゃないとジムチャレンジ出来ないじゃん」
「……だよねぇ」
　あたし達は隣り合って座り、その手に温かなココアを持ちながら、お互いに顔を合わす事なくテントの入口を眺めている。
　危惧していた以上に会話は途切れることはなく、あたしでもこんなに長話が出来るんだ。なんて少し感動するくらいだった……多分、それはユウリが話し上手であるのが大いにあるのだろうけれども。
「でも、なんとなくだけど理由に思い当たる所はあるなぁ……」
「え？　教えて教えて」
「駄目。これが本当やとしたら自分が情けのうて仕方なかけん」
「えー」
　よもや地元の応援団(エール)があたしの為にやってたとしたら、恥ずかしいなんて物じゃないもん……言える訳なか。
「……そう言えば、さ」
「うん？」
「ユウリ、あんた何か悩んでるんだっけ」
「……」
　ランタンのともし火が、大きく揺らめいた。
「……まあ、話したくないって言うんならアレだけど。助けてくれたお礼だよ、もしよかったら話してみる？」
「あ、いや……べ、別に悩みとかは～……」
「大方ホップっていう幼馴染ん事やろ」
　途端にユウリは飛び跳ね、ココアを少し零した。分かりやすか。
「な、なな、なんで……なんでなんで……！」
「前会った時にその子の話ししたら、何か辛そうな顔してたもん。確証は持ってなかったけど、当たりって感じかな？」
「うっ、は、謀ったなー！」

引っかかりよる方が悪か。
しかして、恋話とかそういう話だとしたらあたしには太刀打ち出来なさそうかも。経験とかないし……なんて更に探りを入れてみたら、
「え？　あ、恋とかそういうのじゃない、ないない！」なんてカラッとした笑みを見せられた。あーうん、これは確かになさそうやね。
「でも、ホップん事で悩みがあるんだ」
「う、うん……というより、それは私自身の悩みでもあるんだけどね……」
雨は止む気配が見当たらず。
あたしの相棒は既に膝の上で眠たげにしていた。
「ホップってさ、ダンデさんの弟さんなのは知ってる？」
「あぁ、チャンピオンのね。この前ニュースでやってるの知っとったい」
あの子も順調に勝ち進んでいるのは知っている。
今も尚あたし達と同じくらいにジムバッジも集めてるんは分かるけど。
「うん……それで、その子。つい最近ポケモンバトルで別の子にボロ負けして。それで言われたんだってさ『あなたが弟だなんて、ダンデさんの顔に泥を塗っているようなものだ』って」
「……」
「それでホップは思い悩んじゃって、すっごく思い悩んじゃってさ」
「ジムチャレンジも辞めそうだって？」
「あ、ううん！　そんな事はないんだよ！　ホップは強い子だし、自分なりに答えを導き出せる子だもん。今も試行錯誤してるけどホップなら、多分もうすぐ良い答えだって手に入れる筈！」
「ふぅん……」
思うに、ユウリのホップに対する信頼はかなり高い。
恋にはなってないけど、親友として大切に思っているのが分かる。
でもそれなら何も問題なさそうだけど……？
「ただ、ただね。あたしはそんなホップに何も良いことをしてあげられてないんだ……」

「……」
「慰めの言葉はそりゃ簡単に言えるよ。でも、辛かったねとか、そんな事ないよ、とか気軽に言う事はできても……そんな慰め、心からホップのためにはならないし、多分ホップはそんな言葉望んですらいない」
「……」
「だからね、私はどうすればいいんだろう……って思って。思って思って……それで、何もしてあげられてない、それがどうにも……嫌、なんだよね」
「……ポケモンの実力が問題なら、一緒に特訓をするとか、対戦をしてみるってのは？」
「対戦……勿論したよ、ホップが望んだから」
「じゃあ」
「でも、あれじゃ駄目だと思った……だって、だって――」
「だって――私は、ホップより遥かに強くなっちゃったから」

――雨は更に強くなっているように思えた。

「ホップが望む度に、私は全力でぶつかったよ」
「初めてポケモンを手に入れた時」
「ねがいぼしを手に入れた直後」
「ジムバッジを初めて手に入れた時」
「3番道路で、バウタウンで、ラテラルタウンで、キルクスタウンで――どこでも全力でぶつかった」
「ホップとのバトルはね、どの人とやるよりも楽しかった。あの子は目標にいつでも真っ直ぐで、ポケモンたちとも同じくらい分かり合ってるから、生き生きしていて」
「だからそんな真っ直ぐなバトルに手加減なんて出来ないと思って全

力で戦った結果――そのどの戦いにも全勝してしまった。一匹も倒されることなく、ね」
「最初はホップが手加減してくれてるかなって思ってたの。私はポケモンを何も知らない女の子だし、向こうはチャンピオンの弟さん……ポケモンに勝つ喜びを教えるためにわざと力を抜いて、とか何とか思ってた」
「でもね……違った。ホップはそもそも手加減なんて出来ない。ホップはいつでも全力を出してたけど敵わなかっただけ――ただ私が、強くなりすぎちゃっただけ」
「最初のうちは純粋に喜べていた勝利も、回数を重ねる度に沈みこみ、悩み、本気で悔しそうに唇を歪めるホップを見るたびにこれでいいのかって思えた」
「実力が拮抗してた頃は良かったよ。でも今では……きっと挑まれたら圧勝してしまう」
「なんの気なしに誘われて、さしたる動機のない私が、チャンピオンを心から目指すホップより強いだなんて……皮肉すぎるよね」

――気付けばテントの中はざあざあと降り続ける雨音で満たされていた。

「ねえ……ねえ、私はどうしたらいいと思う……？」

「負けた事のない私の言葉はホップのためになると思うかな……？」

「それとも嘘でもいいから、手加減してホップに勝ち星を与えるべきなのかな……？」

雨を見ていたユウリは、気付けば力なく首を傾げあたしを見つめており……あたしは、あたしは口をつぐむ事しか出来なかった。
この子はあまりにも……あまりにもポケモンの才能に恵まれすぎてしまった。

確たる目標を持ったチャンピオンの弟よりも、そしてきっとどのトレーナーよりも。
誰よりも負けを知る相手に、勝ち続けた人の言葉が響くとは到底思えず。
そして気遣った上で手に入れる勝ち星など、きっとあたしであったら耐えられないだろう。
「……」
「……っ、じゃ、じゃぁ……」
吸い込まれそうな程美しい、トルマリン色の瞳で覗き込まれ続けたあたしが出した答えは……あまりにも陳腐で、その場凌ぎな内容であった。
「ゆ、ユウリはさ……ホップのための壁になってあげなよ」
「壁……」
「うん。超えるべき一つの壁。ホップって子は相当強い子だ、きっとあんたに負け続けたとしても、それはそれって感じで立ち直れる子だとあたしは思ったよ」
「でも……」
「いいの、ホップのためを思うならユウリは気にせずにどっしりと構えていなさい。下手な慰めは確かに意味がないし、そっちからすり寄る必要はない。男の子だもん。頼られる時に頼られてあげな」
「……」
「やっぱり幼馴染なら信じてあげないとね。それに……それに――」
「……それに？」
”もしも負けたいなら、あたしがいくらでも負けさせてあげる”
脳内に浮かんだ言葉は、喉元から出ることはなかった。
あたしは……あたしは、この子のポケモン達に勝つことが出来るのか。
あの危険なキテルグマを相手に、冷静に対処して倒したユウリに、勝つことが出来るのか。
そんな事を思ってしまえばいつもの自信はなりを潜め、どうしても二の句を継ぐことは――出来なかった。

「……ううん、なんでもない。ごめんね、ロクに役にも立てず」
「あっ、ううん……こっちこそ変な話しちゃってごめんね、アドバイスありがとう。でも、うん、ちょっと抱え込んでたから他の人に話すことが出来て、すっとしたかも」
　気付けばあの子はいつものような明るい声色で大げさに振る舞うと、眠くなっちゃった、だなんて言って寝袋にくるまり始めた。
「長話させちゃったね、そろそろ寝ちゃおう？　起きてると体冷やしちゃうよ」
「それもそうだ。……ねぇ、明日は一緒にスパイクタウンに行く？」
「いいの？」
「うん。地元だしね、折角だから街の事色々教えてあげるよ」
「ありがとう！　なら余計に早く寝ないとね！」
「あんま楽しみにしても寂れた街やけん、すぐに紹介も終わってしまうけどなぁ」
　わくわく、って擬音を口にするユウリの隣に、あたしも完全に寝てしまったモルペコと共に寝転び、ライトの灯りを消した。
　テントは完全に暗がりに包まれ、あたしは相棒をかき抱いてまどろみの中に身を委ねていくのだった。

（……あたしは、あたしはユウリを倒すことが出来るんだろうか）

　雨は朝まで粛々（しゅくしゅく）と振り続け、決して止むことは無かった。

『高み』の白百合、『萎びた』金盞花

分厚い雲模様は寝ている間に太陽が追い払っていたらしい。
明るい日差しがテントの中に差し込んでおり、その暖かな光にあたしは起こされた。
あたしの腕の中では未だにモルペコが安らかに眠っており、あたしは数度モルペコの頭を撫で、頬を寄せ、名残惜しさを振り払って起きた。
隣にいるユウリは……未だ夢の中みたいだね。あたしは起こさぬようにテントから出ると、ゆっくりと。大きく伸びをした。
雨上がりの澄んだ空気はあたしの全身に活力を与えてくる。
寝惚けてぼんやりとしていた頭も、全身を包み始める冷気と共に次第に覚醒していく。
今日は……うん。ユウリとスパイクタウンに行くんやね。それであたしもアニキに挑戦する。
何も心配することなか。あたしならきっと勝てるし、ユウリも間違いなく勝てる。
そしてあたしとユウリはバッジを8つ集め、チャンピオンリーグで再開して――、
”私は、ホップより遥かに強くなっちゃったから”
「……」
再開して、ユウリと対戦して――、
”実力が拮抗してた頃は良かったよ。でも今では……きっと挑まれたら圧勝してしまう”
「……っ」
対、戦、して……あたし、は。あたしは。
『あたしがいくらでも負けさせてあげる』。その一言すら言えん……情けなか」
視界の前に広がる門出を祝福してくれるかのような朝日に、美しい景色。
だけど心に深く引っかかった昨日の残滓（ざんし）は、決してあたしの気持ち

を晴れやかにさせてはくれないのだった。

§　§　§

ワイルドエリアから一路スパイクタウンへ。
そらとぶタクシーを使えばすぐに行けるけど、あたし達は時間はかかるけどあえて自転車を使って向かっていた。
それは特訓のため、ポケモン達との出会いのため、そして、お互いに交流を深めるために。
ユウリは同年代のトレーナーこそ多いが、友人らしき友人も少ないらしい。
そしてそんな友人とは出くわす事こそ多いが一緒に行動するということが中々ないとの事。（あたしもだけど）
とにかく誰かと一緒に居たい、あわよくば友達とワイワイしながら旅したいという願いを持っていたユウリは、その念願が叶って顔だけでなく全身から喜びのオーラを振りまいていた。
「今なら9番道路で寒中水泳も出来る気がするよ！　ね、ひばひば！」
「ぎゅるぅ？」
「やめんしゃい……ただの罰ゲームだよアレは」
「うら」
雪路厳しい9番道路の流氷エリアは、何故か大人たちが水着一枚で寒中水泳をしたり日光浴を楽しむという謎の流行がある。
あそこは野生ポケモン達も結構凶暴だし、どう見ても寿命を縮めるための無謀なパフォーマンスに過ぎないと思う。きっとユウリは水泳を楽しんだ直後、火属性のエースバーン……ひばひばに抱きついてガチガチ震える他なかとよ。
「じゃあ穴掘りを楽しむとか！　穴掘り兄弟より掘り進めてみせるよ！」
「まだ健全だね、そっちにしときな」
「ぎゅる……」
「うら……」

うんうんと頷いてたらひばひばとモルペコの二人に呆れた目で見られた。
だって寒中水泳に比べたらまだマシな部類じゃん。それにもしかしたら貴重な素材も手に入るっていう実益もあるんだよ。いいじゃん。なんなん。
「……っとぉ」
「うわー……昨日より凄いね。これ」
他愛もない会話を楽しんでいたあたし達。
気が付けばあたしの故郷、スパイクタウンの前についた……のだけれども。
街の入口がオンボロのシャッターで閉じられ、ジムチャレンジの参加者達が数十人群がってはぐだ巻いたり、ジュンサーさんに文句を言っている様子が見えた。
そしてそんな噂を聞きつけたデイリーガラルの記者たちもその様子を放映しており、何だかお祭り騒ぎの様体になっている。
「……マリィちゃん、どうすればいいと思う？」
「……ここ出身だし、あたしは裏口知ってるから入れなくはないけどね。こっち」
「わ」
しかしこんなに大事になっているとは思わなかった。
今ここで堂々と裏口の事を吹聴してしまえば、何だか大変な目に合いそうな気がする。
あたしはユウリの手ば取ると、人混みを大きく遠回りするようにスパイクタウンのはずれまで移動。うず高く積み上げられたコンテナや、産業廃棄物が残された空き地まで誘導した。
「ここは……ゴミ捨場？」
「兼、あたし達地元民の遊び場だよ。実はこのあたりにスパイクタウンに通じる裏口があるんだ」
「へぇ～……」
ひばひばと共にきょろきょろと物珍しそうに見回すユウリ。
そこに汚いとか言う蔑む気持ちが見当たらないのが嬉しかった。

「そして……ここはあたしやアニキがポケモンの特訓に使った場所でもある。あたし達の街ってさ、整った施設なんてポケモンセンターぐらいしかないからね」
「……」
　あたしの言葉に何かを察したかのように、ユウリが沈黙を返す。
「よくわかっとーね。ユウリ、あんたも町に入りたかったら案内してあげるよ」
「ただし……マリィちゃんと戦って勝ったら？」
「正直勝ち負けは関係なく教えてあげるけどね……あんたは、あたしのライバルだもん。コレ以上の理由なんてないよね」
「うら！」
　ばちっ。あたしの相棒もやる気をみなぎらせ、放電が一帯の陰影を深くする。
　しかしユウリは戸惑いと躊躇（ためら）いを隠せておらず、何かを悩んでいるようだった。
　……分かっとー、分かっとーさ。あたしだってあんたの実力が分からない程愚かな訳ではない。
「ユウリ。何ぼさっとしとるん。早くポケモンを出して戦いなよ」
「マリィちゃん……」
「分かっとー。昨日の話であんたが怖がっとるんがよーくね。あんたがあたしにボロ勝ちしてしまうんやないかと、それであたしも傷ついてしまうんじゃないかと。そう思ってるんやね」
「……っ」
「――あまり、あたしを舐めるんじゃなかと！」
　自分でもびっくりするぐらい大声が出た。
　あたしはまだ構えること無く立ち竦（すく）むライバルに腰のモンスターボールを構えて突きつけて吠えた。
「あんたはそう思ってないかもしれないけど、あたしにとってあんたはライバルだ！　実力はあんたが遥かに上だとしても挑戦する権利はあると！」
「っ!?　違う、違うよマリィちゃん！　私もマリィちゃんはライバル

だって思ってる。みんなみんなライバルだと思ってる！」
「だったら四の五の悩まずかかってきんしゃい！　手加減とか、今後の関係とかをうじうじ考えるじゃなくて……ただただ目の前の勝負に全力を出して見せてよ！　見込み違いだと思わせないでよ！」
ポケモンバトルは実力だけでない、知識も、運も、知識も試される物。トレーナーとしての経験はあたしの方が多い！　あんたが如何に強かろうと、易易と負けるつもりはない！
燻（くすぶ）っていた思いの丈を、張り詰めた空気を吹き飛ばすかのように吐き出す。
路地裏に響き渡ったその激情は、果たしてユウリを説得するに至ったらしい、ユウリは観念したかのように腰に下げたモンスターボールの一つを構えた。

「マリィちゃん、その、ありがとう……私すっかり心配かけてしまったみたいだね」
「……」
ユウリが見せた顔は路地裏にふさわしくない程純白な笑顔だ。
まるで憑き物が落ちたような、そんな表情。
この子は良くも悪くも裏表という物がない――だからこそよく分かる。

「そして……ごめんね、私は確かにマリィちゃんに挑まれた時迷った。どうしよう、またホップみたいに傷つけちゃうんじゃないかって」
この子の心の重荷は、昨日から全く変わっていない。
「本気の本気をかけている人に、手加減……うん。そんなの屈辱でしかないよね」
優しげに微笑む目元が細まり、あたしと同じくらい細く華奢な体から庇護（ひご）欲を誘う雰囲気が、消える。

顔に浮かぶは楽しみにするような感情ではなく、やりたくない行為に手を出すような複雑な感情。

「だから――言われた通りに私も本気を出します」

この子が今抱いている感情それは――

「マリィちゃん。覚悟してね」

――哀れみと諦念だった。

「……」

「……」

バトルが終わった直後だというのに、その場はあまりにも静まり返っていた。

あたしは静けさの中最後まで頑張ってくれたモルペコを労い、モンスターボールにしまいこんだ。

「――うん、やっぱり、あんたは強かね」

「そんなことっ……ある、よ」

「素直になりきれん奴やね。しゃんと誇りんしゃい、ライバルに勝ったんだだから今は胸張って喜ぶところだよ」

「……う、うんっ！　そうだよね、ありがとうマリィちゃん！」

「その意気その意気」

ユウリは道中の様子と全く同じ、どこにでもいそうな垢抜けない子供そのものの表情に戻っており、あたしは空元気とは言え楽しそうに喜ぶ彼女の様子に、合わせるように頷(うなず)いた。

「今回は勝ちを譲ってあげる……でもね！　あたし、スパイクタウンのみんなを喜ばせるんだから！　忘れんで！　もう一度あんたと戦

うため絶対ジムバッジ８個集めるけん！　チャンピオンカップでリベンジやけん！」
「マリィちゃん……！　勿論だよ。絶対にチャンピオンカップで会おうね！」
「っ……じゃ、約束！　あたしについてきてよ」
「わ、とっと……！」
あたしはユウリの手ばとってスパイクタウンまで誘導していく。
何度と無く通った裏道、ゴミの隙間をかいくぐって勝手知ったる道を征く。
気持ち早足気味かも、なんて思ったけど気にしてる余裕はない。だけど早くユウリとの約束を果たしたくて、ついつい急いでしまう。
「ま、待ってマリィちゃんちょっと早っ」
「あ……ご、ごめんユウリっ」
……やはり、案の定早かったようだ。
つまずきそうになったユウリが慌てて声をあげ、あたしはぱっと手を離す。
「う、ううん大丈夫……」
「ご、ごめんね……地元だと思うと何となく気持ちが早ってしまって」
「あはははは、気持ち分かるよ。私もついつい地元とか勝手知ったる場所だと歩幅とか早まっちゃうかも」
気付く。
ユウリを握っていた手が白くなっていることに。
更に言えばあたしは気付かぬうちに強く握り過ぎていたようだ……あぁもう、あたしは、なんて。なんて。
「到着……っと、汚い街でごめんね」
「わぁ……！　わぁ、わぁ、わぁぁぁ～～っ！」
そして子供の頃から見飽きるほど見てきた、スパイクタウンにとうとう到着する。
古びた１本の細長い商店街を構えたこの場所は天井が屋根で覆われて基本的に日光が入ることがなく。左右に立ち並ぶ商店はどれもこれもがシャッターが閉まりきり、開いてる店があると思えばお世辞

にもキレイとは言えない古びた衣服店や飲み屋、あるいは怪しいお店ぐらいしかなかった。
　そんな汚い街でもユウリの目には新鮮なのか、目を輝かせながらきょろきょろと周りを見渡している。
　うん……本当見てて飽きない子だね。でもこの街は危ない所多いから変な所に行かないように注意しておかなきゃ。
「シャッター閉めとったら誰にも挑戦できんっていうのに……どうなっとるんか調べんと」
「マリィちゃん？」
「ごめん、あたしはシャッターの事調べておくから。ユウリはちょっとゆっくりしてて。あ、くれぐれも怪しいところには行かないようにね！」
「え、あっ、えーっと怪しい所って……？」
「余り物だけどコレあげるから後はよろしく！」
「あ。ネズさんのリーグカード……う、うん！　でも怪しい所ってどこの事ー!?」
　そうしてうちのアニキのリーグカードを押し付けるようにして、ユウリの声を背中に受けながらあたしは一路アニキの場所へと急ぐ。
　アイツの視界から早く消えたくて最初は全力で走り。
　視界から消えてからは抜けそうになる足に無理矢理力ば入れて。
　いつもと違う剣幕を見せるあたしに地元の人がぎょっとして、すっごく心配して声ばかけてくるけど、そんな事構う暇もない。
　見知ったアニキのいる場所までよたよたと、零れそうな何かを抑えながら進み。進み。進み。そして――、
「……？　マリィですか。遅かったようですね……ようやくオレの元に挑戦しに来……て……」
　アニキの姿ば視界に収めた途端。あたしの全身が安堵に包まれ、その場にぺたんと座り込んでしまった。
　そんなあたしにびっくりしたのだろう。歌の練習中だというのにマイクをほっぽり出してステージから飛び降りたアニキが、あたしの元に駆け寄ってくれた。

「マリイ!?　どうした、どうしたというのです!?　怪我でもしましたか!?」
「ちが、ちがうったい……ちがうたい……」
「では、では一体何がっ……！」
おろおろしながら顔を覗き込み心配してくれるアニキが傍にいる。
そう思うだけで張り詰めていた心から力が抜け、我慢していた何かが液体となって溢れ出し……それが見られるのが嫌で嫌で仕方なく、あたしは小さい頃のようにアニキの首に手を回して、抱きついた。
「アニキ……っ、アニキ……あたし、あたしはっ」
「落ち着いて、落ち着いて話して下さい妹よ。慌てなくていいので」
まさしく子供にするようなあやし方。
しゃがみこんだアニキにしっかり抱きついたまま、大きく、ごつごつとした骨ばった手で背中を撫でられてしまえば……もう、我慢なんて出来なかった。
「あたしは、くやしい……っ、じぶんが、じぶんがはずかしいばい……っ！」
「……」
「なして、なしてこんなに、あたしは弱い……っ!?　自分がこんなに弱いなんて、思ってもみなかったっ……！」
「……マリイ」
震える体、脈打つ心臓。ぐるぐると回る世界。
頬を伝う液体。そのどれもが邪魔で、不要で。
しゃっくりのようにつっかえながら、あたしの口は止まることなく自らの不甲斐なさをこぼし続けていた。
「あたしには、さいのうがあるとおもってた……っ！　アニキがいってくれた、だから、どりょくしたっ……アニキみたいになりたくて、がんばった……！」

「……」

「なのに、なのにあの子に、あの子のポケモン達に全然太刀打ちできなかったっ、おおぐちたたいたのにっ、なにひとつ、なにひとつできずにっ……！　あたしの子達に、ろくなかつやくもあたえられなくてっ……！」

「……」

「けっきょく、あたしはっ、あの子のライバルですらなりえなかったっ……！　なんでなのっ、あたしは、だめなのっ……!?　あにきっ、あたしはっ」

「……その悔しいと思う気持ちがあるのなら大丈夫です、妹よ」

「あにきっ、あにき……あにきい、あたし……っ、あたしはぁ、あたしはぁっ……！」

「きっとあなたはもっと強くなります。マリィ、あなたはオレよりも素質がある」

「う、あぁあっ、あ、あああぁあああっ……！」

「マリィの実力は未知数です……だから頑張り続けましょう。オレもマリィのためならどんな労力も惜しみません」

「あ、あぁぁあっ、あ、あああああぁぁあああ――――っ!!　あああぁぁぁ――――っ!!」

「……よく頑張りましたね、マリィ」

あたしは泣き続けた。小さい頃と同じくらい泣き虫に戻った。

周りの目すら気にする事ができずに、ただただアニキの腕の中で涙を流し続けた。

ユウリのたった一匹のポケモンの前に、何一つダメージを与えるこ

とも出来ずに全滅した才能のないトレーナー。
そんな無様なトレーナーの声が、寂れたアーケード街に響き渡り続けるのだった。

『窮地』の白百合、『失意』の金盞花

『よーし、だったらユウリも今から俺のライバルだ！　絶対に負けないぞ！』
『ポケモンを連れていればだれもがポケモントレーナー！』
『いいか、ポケモントレーナーはポケモンを戦わせ育てるんだ！』
　私ことユウリのポケモントレーナーとしての第一歩は、そんな幼馴染（ホップ）の一言から始まった。
　それまでは如何にポケモン達が身近に居るとは言え、ポケモンに自ら近づこうとはしなかった。
　憧れはあった。でも何故か分からないけど自分がポケモンを持つというイメージが沸かなくて、ＴＶで見るジムトレーナーさんの戦いは格好いいとは思うけど、ポケモン達を戦わせる文化そのものには若干抵抗を持っていた。
　しかしあの日、幼馴染のホップに誘われ、ダンデさんから貰った始めての自分の相棒、ひばひば（エースバーン）と出会った時から私の世界は大きく変わった。
『やったぁ！　ひばひば勝ったよっ！』
『ふぁいにーっ♪』
『すごいなオマエ！　アニキがポケモンをゆずったのも分かるぞ！』
　――初めての対戦。ホップと戦って何とか勝ちを収め、相棒と分かちあった喜び。
『わ、わ、この子すっごい人懐っこい……一緒に行きたい？』
『イヌヌワン！』
『ふふ。そうなんだ……じゃあこのボールにおいで！』
　――野生のポケモンと出会い、自分の手で捕まえる嬉しさ。
『わわわぁー!?　キテルグマだぁ！　ぱちぱち、ひばひば逃げるよー！』
『ふぁにぃっ!?』『ワンパっ、ワンパパっ！』
『ぐもももぉぉーっ』
　――ワイルドエリアでポケモンの生活を間近で見て、触れて感じる

新鮮さ。
『今日のカレーはちょっと自信あるかも……よーしそれじゃ頂きまー……う゛っ』
『……ふぁに』『……ぬわ』
『ぎゅもぉ……』『……』
『あ、あはは……今日はでも昨日よりは苦くないね……その代わり滅茶苦茶酸っぱいけど……』
――相棒達と旅をし、心を交しあい、切磋琢磨して共に強くなっていく楽しみ。
『ロゼロゼ！　じんつうりき！』
『シェミっ』
『ガグロロロ…っ!?』
『うわっ!?　セキタンザン、かえんほうしゃ……くっ、ひるんで』
『続けてギガドレイン！』
『せ、セキタンザン……く、ボクの負けです……』
『ふぅ……ありがとうございましたっ、楽しかったですっ！』
――そして、強くなったポケモン達と他のトレーナーと戦う誉(ほま)れ。
それは、今までの人生を全て塗り潰してしまう程の衝撃。
私は瞬く間にポケモンという世界にのめり込んでいった。
ホップにせがまれて、流れで承諾したジムチャレンジの事なんてほとんど忘れて、ただポケモンと触れ合い、旅をしていく事に夢中になった。
自分だけの相棒と苦楽を共にし、時に共に喜びあい、悲しみ、苦しみ、そしてそれらを分かち合うのは大変ではあったけれどもちっとも嫌ではなく。注いだ愛情の数だけポケモン達もまた愛情を返してくれるのがとにかく楽しくて、私は嬉々として旅を続けていった。
有頂天にあった私は、こんな楽しいポケモン達との生活絶対にやめたくない。ポケモン達との旅をこれから一生楽しんで続けていくんだ、なんて気楽な考えを持っていた。
だけど。そんな楽しい日々が延々と続く訳がなかった
『オレが弱いとアニキまで弱いと思われる……そんなのイヤだぞ！

アニキは無敵のチャンピオンなんだ！』
『ホップ……』
　他ならぬポケモンの世界へ導いてくれた親友、ホップが吠えた。
　いつでも底抜けに明るく振る舞っていたのに、急に弱音を吐き始めたのだ。
　その変わり様に私は少なくない動揺してしまう。本気でホップに同情したし、そのけなした人に強い怒りを抱いた。
　ホップの悲しむ姿が見たくなくて、何か励ましになるような事をしたいと思ったけれども、私の行動よりも先にホップは私とのポケモンバトルを望んできた。
『ライバルのオマエと戦えばなにか分かる筈……よーし勝負なんだ！
　気合チャージするぞ！』
『――うん、その意気だよホップ！　ホップなら絶対に乗り越えられるよっ！』
『応っ！』
　だから、ホップのためにも私は全力をもってホップと対峙した。
　下手な手加減はきっとホップは望んでいない。だからこそ。今の全力で。
『チームのメンバーも入れ替えてオレの可能性を探ったけど、なんだかしっくりこないぞ……だからオレは弱いのか……』
『そんな事ないよっ、少し驚いたよ。見たことないポケモンばかりで……』
『それでも。負けは負けだ……』
『……』
　当然と言うのは失礼かもしれないが、捕まえたばかりのポケモン達と絆を深めあったポケモン達とでは地力の差は歴然。その勝負には難なく勝ててしまった。
　ホップは更に落ち込む様子を見せて焦ったが、すぐに立ち直ったかのように元気に走り去っていたので、最初は問題ないと思っていた。
　――この頃から、私はポケモンバトルに対して小さな違和感を覚えだしていた。

『トレーナーのオレが迷っていたら、ポケモン達も力を出せないな……だけど、オレも強くなっているぞ！　オマエよりもスピードは遅いけどな！』
『……うんっ、ホップも強くなっているよ。早く追いついてきてね？』
『っ、あぁ！』
再度私はホップに挑まれ、それを快諾し――そして、またホップを倒した。
今回も何一つ苦戦することはなく、自慢のポケモン達の強さを見せつけた。
ホップは晴れ晴れした笑顔をみせていたが、その拳が強く握りしめられていた事を、私は見逃さなかった。
『……ライバルのオマエに勝てない、か……だけど光は見えてきた』
『それなら良かった……かな』
挑まれた。挑まれ続けた。そしてそのたびに全力で迎え撃った。
ホップの為になるならと全力を尽くし……そして、その全てで打ち負かした。
具体的な目標を持って、苦悩し、毎日駆けずり回って特訓しているホップ。
明確な目標もなく、ただポケモンと触れ合いたいが為に旅をする私。
なのに、なのに不思議な事にホップと私の差は出会った頃から広がる一方だった。
彼を打ちのめすたびに、彼の悔しそうな表情を見るたびに違和感は強くなり、その違和感はやがてホップだけではなく、他のトレーナーを打ち負かしても感じるようになった。
『負けてもぜったいに、ぜーったいに悔しくなんかありませんから……っ！』
『……』
考えれば当然の事だ。勝者がいるなら、敗者もいる。
勝って喜ぶ人がいれば、負けて悔しがる人が出てくる。
私は幸いにも勝負でほとんど全て勝利を収めてきたから気付き難

かっただけで、私の勝利で悔しがる人が出てくる、辛い思いをする人が居る。そんな考えに思い至ってしまった瞬間――私の中でポケモンバトルは楽しいものではなくなっていた。
『こ、こんなの嘘だぁっ、やり直しを要求します！』
『なんで勝てないのよ！　こんなに実力の差があるっていうの!?』
『そ、そんな……そんなぁ……』
積み重なる白星の数々。
そしてその数だけ私の心はささくれだった。
みんなの悔しさが、そして勝利に比例して載せられる期待が、私の全身を重くした。
一時期は手加減したり、力を抜いたりして負けを譲るべきかなんて考えもしたけど――そんな事出来る訳がないのだと気付いた。
だって私はホップにライバルであってほしいと望まれたんだ。手を抜いて負けるなど、彼の名誉を汚す。ひいては推薦してくれたダンデさんや、期待してくれたソニアさんにも、そして応援してくれているみんなにも申し訳がつかない。
だから私に出来るのは『全力を尽くす事』。ただそれだけなのだ。そう考えて私は手を抜かずに挑んだ。
そんな私の心を汲み取ってかポケモン達は私の指示に期待以上に応えてくれて。お陰で道中のジムトレーナーとのバトルも、そしてジムリーダーとの相手でも苦戦することなんて無かった。
『今ジムトレーナーの中で全戦全勝中の子がいるんだって？』
『ニュースでやってた子だ！　あの子が全勝の……！』
『ユウリ選手、流石ですね』『ユウリ、やるじゃん』
『ユウリ選手がんばれー！』『負けるな！』『凄いぞ、ユウリ！』
『その調子で頑張ってね』『頑張れ！』『勝ち続けろ』
『応援していますからね！』『絶対に負けるな』『ユウリ』『ユウリ！』
常に勝ち続けた私はもはや負ける事は出来ず。
ただ敗者の姿を見て心を傷ます日々を過ごすばかり。
願わくば、誰か私をこてんぱんに叩きのめして欲しい。負けた時の気持ちを、心から味あわせて欲しい。そう願って、願って、願い続け

ているけれども――バッジが６つ揃った今でも、まだその時を迎えていない。

――そして今。

私は先程までマリィちゃんと勝負し……またも勝ち星を得てしまった。

「はぁ……」

マリィちゃん。

初めてのジムチャレンジにのぼせ上がる私に声をかけてくれた、優しくて可愛い子。

パンクな格好で、かつ目つきが鋭いから怖そうに見えるけど、性格は至って真面目で面倒見がよく。そして、ホップと同じく私をライバルと認めてくれた頑張り屋さんだ。

彼女はホップと同じくらいポケモン達に真摯（しんし）に向き合っており、私にとっての数少ない大切なお友達でもある。（向こうはそう思ってるかは分からないけど……）

私の心は当然ながら曇天（どんてん）模様だ。

あの子との実力の差はワイルドエリアの時から分かっていた。

だから申し込まれた対戦もきっとよくない結果になるのだと思い、やりたくはなかった。

……それでも他ならぬマリィちゃんが願ったからこそ、私は全力で迎え撃った。

『たいたい（タイレーツ）、インファイト』

『レパルダス……っ！　くっ、ドクロッグ。お願い！』

『インファイト』

『ズルズキン！』

『かわらわり』

私のたいたいは指示に全力を持って応え。

マリィちゃんのポケモン達はたいたいの一撃で次々倒れ伏していく。

それはもはや駆け引きなんてどこにも見当たらない、ただの一方的な蹂躙（じゅうりん）劇。

マリィちゃんの雰囲気が手持ちが失われる度に変わっていくのが分かる。
当たり前だ、手塩にかけたポケモン達が抵抗もままならずにやられるなんて……そんなの見ていて面白くないし、やり切れなさを感じない訳がないんだ。
そして。そしてとうとう――、
『モルペコ……――お疲れ様。よく頑張ったね』
なすすべもなく倒れたモルペコを抱えたマリィちゃんの一言で勝負が終わった。
寂しそうで、それでいて耐え難い何かを堪(こら)える様は、今まで何度となく見てきたホップの姿が重なっているように見えた。
私の心は縄で締め付けられたかのように痛みを発し続けていた。
勝負の後も気丈にもなんでもないと振舞うマリィちゃんだったけど、街の道を教えてもらっている途中も動揺しているのがありありと分かっていた。だけど何も、何も声をかける事は出来なかった。勝者が敗者にかける言葉なんて、あるのだろうか。そもそも私なんかがかける言葉なんて、逆効果にしかならないのだから。
「……」
マリィちゃんと別れ、取り残された私は改めて街を見渡す。
薄暗く、綺麗とは言いがたいけれども、ぎらぎらとした活気が感じられる街。
いたるところに特徴的な格好をしたエール団の人がいて、よそ者である私にじろじろと視線を寄越しているのが分かる。うぅん、なんだか不穏(ふおん)な雰囲気だ。
「マリィちゃんは変な所に行くなって行ってたけど……」
「ぎゅるぅ?」
不安なので出てきてもらったひばひば(エースバーン)は、暇つぶしがてら炎に包まれた小石でリフティングをしていたけど、危ないのですぐに止めて貰う。（ひばひばは暇があるとすぐにコレをしだす）
唯一怪しくない場所であろうポケモンセンターの前で、何をするでもなくボーっとスマホロトムを眺め続けていると――不意に、私の前

に誰かの気配を感じた。
「……！　マリィちゃ――」
「……」「……」「……」
「……」「……」「……」
「――ん……？」
そこにマリィちゃんの姿はなく、その代わりに私を取り囲むようにして何人ものエール団の人達が待ち受けていた。
その人達は男の人、女の人が入り混じってみんながみんな私に視線をくれている。
そして彼らの視線にははっきりとした敵意、怒りが込められており、ひばひばは敵意を敏感に感じ取って、私の前に立って威嚇をしていた。
どうしてそんな目で私を見てくるんだろう。
私は覚えのない敵意に困惑し、そして恐れてしまう。
「……あんた、ジムチャレンジャーですか？」
「あ、はい……」
「ならあたし達について来てください。ジムチャレンジがありますので」
やがてエール団のうちの1人、おじさんが私へとそう告げると、途端にみんな背を向けて街の奥へと進んで行く。
私はどうしたものか少し悩んだけれども、そもそも当初の目的はジムバッジの獲得だ。意を決するとひばひばと共にその後を追う。
明らかに歓迎されていない張り詰めた空気の中、足音だけが響き渡る。
「……あのっ。あのマリィちゃんはどこに……？」
「おじょうも奥にいます。いいからついて来てください」
沈黙に耐えきれず声をかけても帰ってくるのは有無を言わせぬ強い口調。
私は口を塞ぐしかなく、彼らの背中をただただ追うばかり。
ガラクタが転がる道を歩き、バリケードされた道に入り、がらんとした廃墟のようなお店を通り過ぎてゆき――そして、

「!?　ふぁにっ！」
「えっ!?」
「……ちっ！　勘がいい、流石ってことですか」
急にひばひばがその場から跳躍して何かを避けた。
同時に背後から聞こえる声……振り向くとそこにいたのは、別のエール団の人に、口から舌をでろんと垂れ下げ唸り声をあげる臨戦態勢のマッスグマ。
そしてそれを切欠に狭い通路から更に数人のエール団の人が現れ、私は前後を彼らに囲まれてしまう。
「こ、これって……一体、どういう事ですか……！」
「どういう事も何も、ジムチャレンジですよ」
「そうです、ここスパイクタウンのね、他のジムではステージギミックなんて物があるようですけど、あいにくあたしらの街は貧乏。なのでこんなやり口で我慢していただきたーい」
エール団の人たち全員がその手にボールを構えだす。
まさか、この数全員で同時に相手しろって言うこと……!?　そんな無茶な！
「おっと安心してください、最大でも二匹までしか出しませんよ」
「ルールは守りますよ。可能な限りね」
睨み付けてくるマッスグマとは別に、私の後ろでズルッグが飛び出してきたのが分かった。
私は逃げ出すことも出来ない状況で覚悟を決めて、たいたいのボールに手をかける。
ダブルバトル、それも囲まれる形でなんて聞いた事ないし、経験もないって言うのに……！
「とは言え……まあ少し、ルールから外れちゃうこともあるかもしれません」
「あたしらのポケモン全部血気盛ん。ひょっとしたらラフプレーしちゃうかも」
「あくタイプの使い手ですからね、ふいうち上等、かげうち常套、わるだくみなんて日常茶飯事」

「大丈夫です、ひどいようにはしません。ただチャンピオンは諦めて貰うかもしれませんが」
エール団の人はみんながみんな笑っている。
だけど笑っているのは顔だけで、その目は全く笑っていないのが分かる。
「あなたお強いんでしょう？　なら弱っちいあたしらの精一杯の挑戦、余裕で飲み込んでくださいな」
スパイクタウンで、前代未聞のジムチャレンジが始まろうとしていた。

『暗闇』の白百合、『失意』の金盞花

前にマッスグマ。後ろにズルッグ。
場に居る味方はひばひば一匹。
私は急遽始まったジムチャレンジに動揺を隠せずにいられない中、ダブルバトルに備えてもう一匹、自分のポケモンを出そうとする。
出すのは先程マリィちゃんを打ち破ったたいたい。
エール団の人達も基本はあくタイプが中心。問題なく相手を打ち破れる筈。
たいたいの入った腰のボールを握りしめ、それを投げこもうとし、
「お願い、たいた――?!」
「マッスグマ、『つじぎり』！」
『ぎゃうっ!?』
まだボールを投げてもいないのに、攻撃……!?
幸い、ひばひばにはあまり効いてないようだけど動揺してまともに食らってしまったようで、思わず後ずさっている。そこに、
「後ろを忘れちゃぁいけないよ、『かわらわり』！」
「ひばひばっ?!」
ちょうど背後に回っていたズルッグが、右腕を勢いよく振り下ろしている！
右肩にあたった一撃の痛みにひばひばは顔をしかめ、すぐに前転して距離を取って怒りを顕わに威嚇する。そしてそんなやり取りが終わった時に、ようやく私のたいたいが場に出たのだった。
「まだ出揃ってないのに！」
「戦いのゴングはもう鳴らしてた筈ですけどね」
「それに、お強い貴方がてっきり一匹で挑んでくると私らは思ってましたかーら」
周りから聞こえるへらへらとした軽い笑み。
私にはそれが明らかな嘲りと悪意に満ちていることがありありと分かった。
これが普通のダブルバトルという認識を忘れておかないと、痛い目

を見る事になる。
私はこのやり取りからそう予感していた。
ただ今ので分かったけど、この人達のポケモンは1対1ならば特に問題にはならない。
問題なのは多勢に無勢のこの状況だ。
ダブルバトルと言えど前後を挟まれているこの状況は、戦況の判断が遅れ、的確な指示を出すことが出来ない――そう判断した私はポケモン達に目配せをし、大声で命令を出していた。
「そっちがその気なら……っ、たいたい、『であいがしら』『であいがしら』：場に出た直後しか出せないが、攻撃力の高い先制技。！」
ひばひば、かえんボール！『かえんボール』：小石を燃やした炎のボールで相手を攻撃する技。威力が高く、時々相手をやけど状態にする。　出力強めで！」
『グガァっ!?』
「ズルッグ!?」
私の命令を発し終えた瞬間に列をなして飛びかかるたいたい。
先頭の隊長格の丸いボディがズルッグのお腹に突き刺さったと同時に、その隊長格の背中に1コンマのずれもなく他のタイレーツが殺到。ロケットのようにその威力を押し上げる。
ズルッグは威力に耐えきれずに一撃で失神した上、トレーナーの元まで吹っ飛び、トレーナーもまた抑えきれずに倒れ込む。
そして格の違いを見せつけたたいたいの後ろでは、足元の小石を蹴り上げたひばひばが、その石に熱を注ぎ終えていた。
赤熱化し大きな炎をまとったその石がひばひばの膝上で跳ねて一際高めに舞ったと思えば、次の瞬間。そのつま先から離れ、火の粉を撒き散らしながらマッスグマへと向かっていた。
「ひぃっ!?」
「うわぁっ!?」
それはまるで小さな隕石だ。赤い軌跡を残し、マッスグマが反応しきれない速度で直進していく！
当然避けることも出来なかった哀れなマッスグマの横っぱらに着

弾。それと同時に周りに小さくない炎が撒き散らされ、トレーナー達の円も思わず崩れてしまう。
私は出来た隙を逃さず、崩れた穴めがけて走り出す。
ひばひばやたいたいも私の考えを読んで、後に次いで追いかけてきてくれた。
炎舞うその先、包囲網さえ抜け出せてしまえば――！
背中のバッグが激しく揺れるのを感じながら、全力で包囲を突き抜けようとした私。しかして私はすぐにその足を止めざるを得なかった。
進行方向に投げ込まれたダークボールダークボール：モンスターボールの一種。暗い所にいるポケモンを捕まえやすい。から、一匹のポケモンが飛び出してきたのだ。
それは通せんぼするように両腕を広げた厳しい顔を持つ凶悪なポケモン。タチフサグマだった。
「小癪（こしゃく）な真似してくれるじゃないですか！」
「ひばひば、『にどげり』『にどげり』：2本の足で相手を蹴りとばして攻撃する。2回連続でダメージを与える。！　たいたい、『インファイト』『インファイト』：守りを捨てて相手のふところに突撃する非常に攻撃力の高い技。ただし使用後は自分の防御と特防がさがる。！」
「無駄ですよ！　タチフサグマ、『ブロッキング』『ブロッキング』：1ターン限り相手の攻撃を全く受けなくなる。連続で出すと失敗しやすく、防御した相手の防御をがくっと下がる。！」
進行方向を塞ぐタチフサグマに飛びかかった二匹の私のポケモン達の攻撃。特に格闘に弱いタチフサグマには一撃でのしてしまうそれを、ことも無げに躱し、受け止める光景に思わず歯噛みしてしまう。
「トレーナーにも攻撃するなんて卑怯だと思わないんですかね？」
「それともこれがお強いトレーナー様の正体って訳ですか」
そして足を止めてしまえば、追いついてきたエール団の人達にまた囲まれてしまう。
音もなく飛び出して来たフォクスライが、後ろから私達を睨みつけ、前ではタチフサグマが仁王立ちをしている。これでは最初の構図

と全く変わらない！
「っ、あなた達がそういう事をするから、仕方なく……っ！」
「そういう事？　そういう事ってどういう事でしょうかね」
「ポケモンバトルには事故は付き物です。意図せぬ結果を招くこともあるでしょう」
『っ!?』
「たいたい!?　このっ、たいたい『かわらわり』！」
　私の背中側で音もなく忍び寄っていたフォクスライの『ふいうち』『ふいうち』：相手の不意をついて攻撃する。相手より先に攻撃できる。が、たいたいに当たってしまう。その威力こそ大したことないが、こんな状況では私の動揺に拍車をかけるのにこれ以上なく効果的だった。
　返す刀で倒そうとしたたいたいの攻撃は、当然そのフォクスライを一撃の元に沈める。しかし、背後で行われる悪事に私は見事引っかかってしまう。
「おっと、こっちも忘れちゃダメですよお嬢ちゃん！　タチフサグマ、『じわれ』『じわれ』：地面に無理矢理裂け目を作り、その裂け目に相手を落とすという強烈な技。命中率は低いが、当たるとどんな相手も一撃でひんしにする。」
「えっ!?　ひ、ひばひば『まもる』『まもる』：1ターンに限り相手の攻撃を全て無効化する。連続で出すと失敗しやすい。！」
『!?　ふぁ、ふぁにっ！』
　『じわれ』!?　成功確率の低い技とは言え、当たればどんな相手でさえ一撃で倒してしまう危険な技！　一か八かとは言えこんな狭い路地でそんな危ない技を使ったら、この場に居る人みんなが危ないっていうのに！
　混乱の極みにある私が命令を先出しして急いで振り返ってみれば、そこには怯えるひばひばの姿と、殺気溢れる顔で睨みつけるタチフサグマと悪どい顔で笑うエール団の人がいた。
「おっと、すみません。『こわいかお』『こわいかお』：恐ろしい顔で相手を睨み、怯えさせて相手の素早さをがくっとさげる。の間違いでし

た」
「な、なんでっ！　今じわれって！」
「ですからただ言い間違えただけです、タチフサグマはそもそも『じわれ』は覚えませんしね」
「くっ、う！　うぅ……っ！」
けらけらと笑う女性の人の発言で、私はようやく悟る。
私が見えて無いことをいい事に言葉だけで私を騙し、間違った命令を出させようとしたのだ！　そんな稚拙な技に面白いように引っかかってしまったという事実に、かぁっと頭に血が上る。
「レパルダス、『あくび』『あくび』・大きなあくびで相手を眠気に誘う。次のターンに相手を眠り状態にする。です」
「させないっ、たいたい、もう一回『かわら……きゃっ!?」
「っとぉ！　悪いですね、景気づけのブブゼラ応援などによく使われる管楽器。騒音めいた音が出る。は煩かったですか!?」
命令しようとした直後、すぐ近くで大音量で響き渡る不協和音に思わず体が竦(すく)んでしまう。
エール団の一人がブブゼラを思い切り吹いてきたのだ！
その妨害のせいでたいたいに命令は届かず、結局レパルダスのあくびを許してしまう。
「っぅ、ひばひば！　『にどげり』！　もう一度！」
『ふぁうっ！』
『グガアァァッ!?』
「タチフサグマ！　よくやった！」
「なら次は私のでばーん。ドラピオン！　景気よくやってきなさーい！」
これまでの相手の手持ちは全て一撃。
私の自慢のポケモン達なら容易く倒す事はできる。
だけど、だけどこれじゃキリがない。
一匹倒したと思ったらタイミングを置かずに他の人がすぐにポケモンを繰り出してくるのだ。
数十人以上居るトレーナーがどれだけ手持ちがいるのかもわから

ず、暖簾（のれん）に腕押しするような感覚を覚えてしまい、やるせなさが全身に伸し掛かる。
「っ、たいたい……！　お願い起きて！『インファイト』！」
「おっと、ならレパルダス『ふいうち』！」
『あくび』の効果で強制的に眠りについた、たいたい。その懐に飛び込んだレパルダスの攻撃は激しい音を立てて突き刺さり、その小さな体が吹き飛ばされる。
相性の悪い技のため、これまた大きなダメージにこそなってはいないのが幸いだ。
そして強い願いが叶ったのか、今の一撃でたいたいの眠りが覚め。瞬時に体勢を取り戻したたいたいは、ボールが跳ね回るかのようにレパルダスに一気に群がり、６体同時に襲いかかってレパルダスを倒す。
しかし、そんな勝利をあざ笑うかのように新たに飛び出してくる別のポケモン――私は苦々しく口を歪めてしまう。相手をするにしてもこのままじゃ……やっぱりこの場からまず逃げないと。
「逃げようたってもうさせませんよ。ドラピオン『どくびし』『どくびし』：相手の足下に毒の棘をしかける。交代で出てきた相手のポケモンを毒状態にさせる。！」
「そのタイレーツも大分疲れているようですねっ！　大丈夫ですかぁ!?　マニューラ、『ねこだまし』『ねこだまし』：先制攻撃で相手を確実に怯ませる。　戦闘に出たらすぐに出さないと成功しない。！」
しかし思考を呼んだかのような矢継早の攻撃に防戦一方。
まだ手持ちは一匹足りとも落ちてはいないが、このままではジリ貧だ……！
「ひばひば、かえんボール！　たいたいは頑張ってくれてありがとう……行って、ぱちぱち（パルスワン）！」
っ、ひばひばの一撃はドラピオンにかなりの痛手を与えたが……倒せていない！
たいたいと交換したぱちぱちは辺りに散らされたどくびしを踏んで毒状態になってしまう。ごめん、ぱちぱち！

「ドラピオン、エースバーンに『どくどくのキバ』『どくどくのキバ』：毒のあるキバで相手に噛み付いて攻撃する。　猛毒を負わせることがある。！」
「マニューラ、パルスワンに『きりさく』！」
「遅い！　この二人は私のポケモン達の中で一、二を争う足の早さなんだから！　ひばひば、今度は『ねっぷう』『ねっぷう』：熱い息を相手に吹きつけて攻撃する。やけど状態にすることがある。！　ぱちぱちはマニューラに『ワイルドボルト』『ワイルドボルト』：全身に電気を纏って相手に突進攻撃する。自分にも少しダメージを受ける。！」
『ふぁにににっ!!』
『ヌワワワォオンッ!!』
「く！」
「うぁ、あっつい！」
　ひばひばを中心に広がっていく灼熱が路地の景色を歪ませ、その景色が激しい電力により点滅を繰り返す。
　灼熱の風がドラピオンとマニューラに撒き散らされ、そして破裂する音を伴った電気を纏ったぱちぱちがマニューラに突進。強烈すぎる一撃がマニューラを吹き飛ばす！
　これで少なくとも二匹のポケモンを同時に倒すことができた筈！
　周りの人も熱さに怯んでいる、逃げ出すなら今しか……!?
『ふぁぅぅっ!?』
『グギュオロロ！』
　――ドラピオンがまだ倒れてない!?
　どくどくのキバがひばひばの腕に突き立てられているのが目に入り、私の思考が止まってしまう瀕死直前のポケモンがひばひばの攻撃を耐えることが出来る筈なんてないのに……！
　常識を疑う光景に狼狽する中、ふとドラピオンの足元に転がっているなにかに気付く……あれは！
「持ち主じゃない人が『かいふくのくすり』『かいふくのくすり』：ポケモン１匹のＨＰと状態異常をすべて回復する。を使ったんですか

……!?　ダブルバトルなのに第三者が回復するなんて、ルール違反じゃないですか！」
「はぁ？　何言ってるんですか、そんな事するわけないじゃないですか」
「だって、だってそうじゃないですか！　さっきのひばひばの攻撃でドラピオンは倒れかけだったのに、耐えられる訳がないんです！　そこに空の薬も転がってます！　そんなの……っ！」
「あぁ、偶然ゴミが転がってただけですよ」
「路地は掃除が行き届いてないので、そういうのも落ちてるでしょうよ」
「倒せなかったのは自分のポケモンの実力不足です、喚かないでください」
　私の、私のポケモンの実力不足……？
　決して非を認めないばかりか、飛び出した言葉に、私はとうとう明確に怒りを覚えてしまう。
　旅をはじめてまだ1年も経っていない。だけど、この子達の事はその旅の間でどれだけ苦楽を共にし、どれだけ心を交わし合ったか計り知れない。
　この子たちの強さは私が一番知っている。
　あんなに私と共に頑張ってきたこの子達が実力不足なんて事は、ありえない！
「……訂正して、ください」
「うん？」
「訂正してくださいっ！　私のポケモンは、私が一番知っています！
　決してこの子達が実力不足なんて言わせません！　大体寄ってたかって卑怯な手を使って……そんなにまでして私に勝ちたいんですか？　みっともないと思わないんですか!?」
「何を言い出すかと思えば……」
「これはジムチャレンジで、ただのダブルバトルですよ」
「勝つ勝たないじゃなくて、審査です。貴方がネズさんに挑戦するに値するかを認めるものでーす」

やれやれと言わんばかりに口々に飛び出す、エール団の言い訳。
バトル中、初めて覚えた耐えきれぬ怒りに、ボールを握る手に力が入ってしまう。
「ありえない数で連戦したり、音で妨害したり！　あまつさえこんな囲んで戦うなんて、おかしくないんですか!?」
「だからそれがジムチャレンジですよ」
「中には偶然もありますけどね」
「特にあなたは自分が強いと思ってるんでしょう？　この程度ハンデだと思ってほしいですね」
変わらないエール団の態度に、業を煮やすしかない私。
当然ながらその間も彼らは待ってくれず、バトルは続いていく。
ひばひばはドラピオンを振り払って『にどげり』でようやく倒すが、先程の攻撃で毒状態に陥ってしまい明らかに辛そうだ。ぱちぱちも相手を倒すことは出来たが同じく毒状態で顔色が悪く。新たに現れたポケモン達を前にしていつもの明るい様子は見られない。二人共苦しそうだ。
「はん、自業自得ですよ」
「何なら降参でもしまーすか？　それなら受付てあげますよ」
「ただし、チャレンジは当然失敗扱い、チャンピオンの道も諦めて貰いますが」
「なんですか……本当、なんなんですか！　なんでそんなに私を……っ、私が何をしたっていうんですか！」
震える体、鼻頭がツンとする感触。歪む視界。
抑えきれない感情にしゃくりあげそうになりながらも、私はこらえて出し慣れていない怒りを相手にぶつける。
「何をした、だと――？」
しかして、そんな私の怒りに帰ってきたのはそれ以上の怒りだった。
「そんなの、アンタがお嬢を泣かせたからに決まってるだろうが！」

「――……え？」

「お嬢があんな姿を見せるまで叩きのめすなんて事ないだろうが！」
「お前がどれだけ強いかなんて知らないし興味もないが、反則をやったんだろう！」
「何が期待のチャレンジャーだ！　お嬢相手に反則まがいの行為で勝利を収めて、泣かせるなんて最低だ！」
「だからやり返してやってんだ！　お前が何をしでかしたかは知らねえが、スパイクタウン流になぁ！」
怒声が、罵声が明確なナイフとなって私の心に突き刺さる。
私が、マリィちゃんを泣かせた？
私が反則をした？　どうして？　そんな事一度もしてないよ。
なんで、マリィちゃんが、私のせいで？
「だって、なんで……さっきまで」
「この街でネズさんに次いで才能あって頑張り屋のお嬢が取り乱す程追い詰めるなんて、反則以外ありえない！」
「インチキ野郎が！　本音を言えば、今すぐ追い出してやりたいが、チャレンジャーだから受けてたってやったんだ！　ありがたく思え！」
「ダンデさんに推薦されて強いと思い込んで、威張り散らしやがったんだろう！　だからお嬢の代わりに俺らがとっちめてやるんだ！」
「そのポケモン達も自信ごとぽきっと折ってやるよ！　インチキトレーナーめ、二度とお嬢に近づくな！」
「そんなの、なんで、私が、私のせいで？　私が悪いの？」
熱風のせいで揺らめく世界の中、エール団の人の口々の口撃が、私の世界を歪ませる。

陽炎のように周りが揺らぐ。重力が私にだけ何倍にもなってのしかかる。足元に満たされた沢山の影が私から力を吸い取っていく。
やっぱり……やっぱり、私が強いからダメだったの？
やっぱり私は手加減をしなくちゃダメだったの？
でも、でもマリィちゃんは全力を望んでいたよ？
みんなだって私の全力を望んでいたよ？
勝ち続けないとダメなんだよね？
ライバルでいないとダメなんだよね？
お母さん。ホップ。ダンデさん、ソニアさん。マリィちゃん。
みんなが望んでいるから頑張ってるんだよ？
でも勝ったら傷つけちゃうんだよ？
誰かを負かしてしまったら、傷がついちゃつんだよ？
私が負けないと駄目なんだってこの人達は言ってる。
私は色んな人を傷つけてきたって怒ってる。だから傷つけてくる。
私はマリィちゃんを傷つけた。
泣かせてしまった。
友達になってくれた人を。大事な人を私が。私が泣かせた。

全部全部。私のせいだ。

「あ。あ。」

金切り音が突如私の脳に響き渡り。世界がその音一色に染まる。
その音と共に抑えてないと壊れそうなくらいの頭痛が起こり、私はへたり込んで両手で頭を抱えてしまう。
音がうるさい。やまない。心臓が壊れそう。苦しい。体がバラバラになってしまう。私の体だけ意識の外に追いやられてしまいそうな異次元の感覚。聞こえない。聞きたくない。終わらせたい。体が震える。ボールを吊り下げた腰のベルトが、がたがたと震えている。

「あ。あああぁ。ああ。あ。ああ。」

勝たないとダメ。負けないとダメ。
それならどうすればいいの？
どうしたらみんな傷つかないの？
どうしたらみんな喜んでくれるの？

「あ。あ。ああぅ。あ。あ。あ、あぁ――――！」

悲しませたくないの。
喜んでもらいたいの。
一緒に楽しみたいの。
怒られたくないの。
苦しみたくないの。
傷つけたくないの。

こんなに辛い思いをするのは、もう嫌なの。

『大丈夫』

頭の中に、声が聞こえる。

『私はよく頑張ったよ。だから――今度からはわたしが代わりに戦ってあげる』

あまりにも馴染みのある声が私に優しく囁き。
私はその声にどうしようもなく安心して……ようやく力を抜いて、目を閉じたのだった。

深い深い闇の底に沈む直前――誰かの悲鳴が聞こえた気がした。

【外伝】
『マホ』の白百合、『決意』の金盞花

「はぁ……」
「どうしたんユウリ？　撮影とかファンサ（ファンサービス）で疲れちゃった？」
　エンジンシティのバトルカフェ。
　あたしとユウリはブティックでの買い物ついでにこのカフェに足を寄せていた。
　今のユウリは現チャンピオン、あたしはジムリーダー。そんな二人が街を歩くとどうなるか？
　答えは……人がわぁっと群がってきて、撮影とか握手ば迫られる。
　ちやほやされるんは嫌いじゃないし、あたしは昔からこう言うの慣れてるからいいんだけど、ユウリはやっぱりそうでもなさそうだ。つい最近まで普通の少女やったけん、仕方ないね。
「あ、いや別にそういう気疲れはあんまりないんだけどね」
「そうなん？」
「うん。ほらダンデさんと戦うスタジアム戦に比べたら雲泥の差だよ。周りの期待、ダンデさんの熱狂的ファンからの熱くて痛いくらいのプレッシャーとかに比べたら……！」
『あ、あの……チャンピオンのユウリさんとジムリーダーのマリィさんですよね!?　さ、撮影とかいいですか!?』
「……え？　あ、撮影ですか？　いいですよー！　ほらマリィもね、ねっ？」
「あ。うん、そいじゃ」
　今もまた親子連れの方に握手と撮影をねだられて相手をするユウリとあたし。
　まあ言うだけあって手慣れとる笑顔だこと。逆に慣れてる筈のあたしの方がまだまだ笑顔がぎこちないから、こうして揃って写真撮られるんはなんか恥ずかしか……。

「そいじゃさっきのため息の理由はなんなん」
「え？　えーっと……」
「あ、でもここで言える内容？　なんだったらあたしの家とかで……」
「大丈夫大丈夫、全然大したことはない理由なんだけどね！」
そう？　なんて澄まし顔で返したけど、ちょっと残念。
久しぶりにユウリと一緒にお泊りしたり出来るかと思っとーたから。
「私のまほまほがさ、何だか最近ご機嫌ななめなんだよねー……」
「うん？　そうなの？」
まほまほはユウリの最新メンバーであるマホイップの事だ。
マホイップはクリームポケモンと言われるだけあって全身がクリームのような柔らかなホイップで出来ており、その愛くるしさから愛好家の多いポケモンだ。またそのクリームの味わいはマホイップが幸せである程甘さに深みが出るとのこと。昔ユウリんば舐めさせてもらったけど、その時は一言では形容できない複雑かつ芳醇な甘みを感じる事ができた。
そして愛嬌だけかと言えばそうでもない。見た目の愛くるしさと優しさと相反して、バトルでは鉄壁の要塞っぷりを見せつけてどんな力自慢も追い返す強みがあるので、ユウリの手持ちでも今や一線級で活躍しているくらいだ。
ユウリはポケモン達と信頼を築くのが上手だ。
どの手持ちとも最大限の信頼を勝ち取っており、例に漏れずまほまほもユウリにベッタベタなくらい心を預けていた筈だが……一体どうしたというのだろうか？
「この間、ちょっとした機会があってお菓子屋で撮影会することになってさ」
――あぁこの間の月間ガラルデイリー6月号の巻頭ピンナップの事やね。
ユウリの顔や服にクリームがめいっぱいついた、ちょっと色気も感じさせるあの写真。秘密だけど3冊買って保存してある。
ユウリはチャンピオン。チャンピオンともなればメディアへの露

出が増えるのは当然だけど、あたしとしては色んなユウリの姿はあたしだけが知っておきたいなって……ううん、今はそんな事考えてる場合じゃないね。
「マホイップって色んな姿や種類があるじゃない？」
「そやね。えーっと、マホミルにわたす飴細工とか進化させる時間帯によって違うんだっけ」
「そ。んで、私のまほまほと、別のパティシエさんのマホイップを並べて撮影させようって話になったんだよー」
　マホイップの種類は判明しているだけでも５０種類以上。味やフレーバーが変わった物が大量にあるため、中々同じ種類というのには出くわさないらしい。
　またマホイップを持つという事は優秀なパティシエであるという証明にもなるくらいには、マホイップはお菓子職人の中でステイタスになっている。違う色あいのマホイップに挟まれるユウリの写真。うん、思い出すだけでも可愛いばい。
『あ、ちなみに私のまほまほはミルキィレモンだよ！　ちょっと酸味があってすっごく美味しいんだ！』なんて愛嬌一杯に言うユウリ。確かにあれは美味しかった。マホイップは幸せであればあるほど甘みが増すって言ってたから愛情いっぱいに育てたんやろね。
「最初は機嫌良かったし撮影も順調。お互いにキャッキャウフフしながらクリームまみれになって撮影してたんだけど」
「見たか」
「え？」
「ううん、何でもなか」
　危ない。本音が漏れた。
「いざ撮影終了ーってなったところでお互いのマホイップをボールに戻そうとして、私のマホイップが固まっちゃったの」
「ふむふむ」
「どうしたのマホイップって聞いてみてもじーっと相手のボールを見つめて動かなくて……それで何気なく相手のボールを私も見てみたらさ、気付いちゃったんだ」

「……」
「相手のマホイップのボール、ラブラブボールだった……！」
「……うん？」
　ラブラブボールがどげんとしたとね？
「うちのまほまほ、ハイパーボールで捕まえちゃったの！　だからそれを深く気にしてるのあの子！」
「……ううん？」
　なんか聞いていくうちに分かったのだけど、俗に言うオシャボ（オシャレボール）問題というものらしい。愛あるトレーナー程、好きなポケモンは特別で珍しいボール（プレミアムボールやラブラブボール、ドリームボールなど）に入れる習慣があるらしい。
　あたしは正直捕まえられればなんでも、って感じなので全然気にしてなかった。
「いや、傾向はあったんだよ！　多分ガラルデイリーのオシャボ特集を読んでた時に一緒にまほまほも居てさ、その時から意味ありげにラブボとかドリボを手で『てしてし』ってしてたの！　入りたいの？　でもごめんね、ボールの入れ替えは出来ないんだ……って言ったらさ」
『●　。　●』
「って顔して見つめてくるの！」
「っ」
　か、顔マネはずるか！
　っていうかこんなお外でそんな顔してたらすっぱ抜かれるとよ!?
「それで今日オシャボマホイップに出会ってしまった結果、とうとうマホイップがご機嫌斜めになっちゃって……！　うぅ、ごめん、ごめんよまほまほ、でもいくらチャンピオンである私でもボール入れ替えまでは出来ないから……ってなんでマリィちゃん笑ってるの!?」
「ご、ごめんっ、だってその顔真似は、ずるっ、ずるい……！」
「もー！」
　……はー、ようやく落ち着いた。
　ともあれ他人の庭を覗いた結果ついつい気になってしまったとい

う感じ？　よくある事ではあるけれども、早い所納得させてあげないと、二人の仲にいらない溝が出来てしまいかねんね。
　話を聞いたんはあたしだし、ここはユウリの一番の親友であるあたしが解決してあげないとね。
「マホイップは今も連れてる？　なら出して見てくれる？」
「え？　あ、うん。まほまほおいでー」
「……」
「あーん、まほまほ機嫌直してよーっ、私も入れてあげたいけど出来ないのー、ごめんーっ」
「……っーん」
　ハイパーボールから出てくるマホイップは見た目の可愛らしさこそ変わらないが、言われた通りにふてくされているようだ。ユウリんばと顔をあわすこともなく、っーんとした表情を見せ、ユウリが抱きしめてようとするとぺしっ、とその手を払い除けていた。
「……なんか思った以上に怒っとーね」
「うぅぅ、まほまほごめん……」
「ユウリ、実はこれボール以外の問題とかもない？」
「え？　でもそれ以外はあんまり覚えが……」
「……多分ユウリは覚えとらんかもだけど、何かしら他の原因がありそうな気がする。なんか覚えない？」
「うーん……うーん……え？　あるの？　まほまほやっぱりあったりするの？」
　むくれた顔をしたマホイップがユウリの足ば叩いとるって事は……間違いなくありそうやね。まほまほは必死にジェスチャーで何かを伝えようとしてる……うーんと、何かを食べる真似……カレー？
「カレー関連っぽいけど……」
「え!?　な、なにかしたかな……」
「カレーが美味しくないとか」
「美味っ、おい、しくはないかもだけど……最近は頑張ってるつもりだし……」
　両指をつんつんと合わせるユウリにあたしは苦笑する。

まああたしがキャンプのたびにビシビシ教えとるかんね。コレで上手くならなかったらあたしが辛い。ようやく『異臭漂うドガース級固形物』から『カレーに似たカレーじゃないカレー』ぐらいには進歩してるけど、やっぱりまだまだだ。
「そのカレーのマホイップ関連の思い出は何かない？　もしかしたらそれかもしれないよ」
「とは言っても……マホイップ関連でカレーって……うーん。関係ないかもだけど、マホイップが機嫌良いとクリームかけてくれるんだよ」
あぁ、前スマホロトム越しに送られてきたホイップカレーやね。
カレーにどどんと生クリームが乗っけられた異種カレー……見た目はアレだけどかなり美味しいとは聞く。聞くけど、あたしはまだ抵抗感が強いかも……。
「あ、その顔。マリィちゃんはまだホイップカレー食べたことないね？　食べてみれば結構いけるよ！」
「味音痴の料理下手のユウリの評価だとどげんしても期待できん」
「ひっどーい！　マリィちゃん食べてもないのにそういう事言うなんて！　大体このカレーは辛口風味にすると滅茶苦茶美味しいんだよ！」
「あはは、冗談冗談。今度気が向いたら食べるとする……今なんて言った？」
「え？　食べてもないのにそういう事を……」
「その後。その後だよユウリ……辛口がどうのって」
「あ、うん。ホイップカレーってさ。やっぱり滅茶苦茶甘いんだよね。私どっちかっていうと辛いの好きだから、タラボとかヒメリ辺りのスパイスをこうどっさり……」
「それだぁ！」
間違いなくそれが原因だよユウリ！
あっ、ほら見てよ!?　またまほまほが例の顔をしてる！
「●　。　●　」
「えっ!?　え、なんで、駄目だった？」

「多分この顔見るに毎回まほまほのトッピングの後に追加トッピングしてるでしょ?!　折角甘口作ってくれたのにすぐに辛口にしたらつまらんやろ！」
「そ、そんなぁ！」
　マホイップからすれば折角甘口トッピングしたものを瞬く間に別の味にされてしまうのだ、それは度し難い気分になるだろう。
　しでかした事に気付いたユウリはすぐさま泣きそうな顔を見せながらまほまほを抱き上げ、まほまほは最初抵抗したけど、主人のそのみっともない泣き顔を見て溜飲を下げたようだ。やがて応えるかのようにすりすりとそのクリーム顔を頬に擦り付けていた。
　……あたしもちょっとしてみた、いやいや。
「んっふっふっふ、どうやら何やら行き違いがあったようですが、元通りになれたようですね」
「あ、マスター」
「どうも……」
　あたし達の席におもむろに近付いたのは、このバトルカフェのマスター。
　ナイスミドルなおじさんで、一日一回戦いに勝つと色々なお菓子系アイテムをくれる人だ。……あれ、なんか手に持ってるけどあたし達別に追加注文してないよね？
「これはお二方の仲直りを祝して、マホイップカフェオレです。良ければどうぞお召し上がりください」
「わぁ……！」
「おぉ……！」
「きゅう……！」
　マスターの手ずから運ばれたそれはなんと、マホイップを模したクリームがふんだんに載せられたカフェオレだった。
　アクセントに添えられた苺に、目元のチョコがマホイップそっくり！　とても美味しそうだ。
「いいんですか!?」
「いいですとも。チャンピオンである貴方がいつも通ってくれている

お陰で、私のお店も繁盛していますからね、んふふふ」
「わぁい、まほまほ一緒に食べよっ！」
「きゅるぅ！」
一人と一匹で楽しそうにカフェを挟んでキャッキャする様子は、何処からどう見てもただの少女だ。これがポケモンバトルで冷酷なる女王とまで呼ばれる存在と誰が思うだろうか。
あたしは、そんな女王の仮面を早く脱ぎ去って欲しいと願う。
かつて語っていた、ポケモンバトルを全力で楽しめていた頃のユウリになって欲しいと思い続けている。そのためには彼女の苦悩を知った存在が、彼女をして『勝てない』と思い知らせた時に初めてそれを見ることが出来るのだと私は考えている。
（今はまだ、それには届かないかもしれない……だけど。近いうちに必ず届かせて見せるから）
あたしは目の前のあるべき光景を目に焼き付けながら、そう誓うのだった。

「じゃあいただきまーす！」
ユウリのスプーンがデコレートしたマホイップの中央に突き刺さり。
そのままスプーンはクリームを大胆に撹拌し、デコレートのマホイップは瞬く間に見るも無残な形に変わっていった。
「あっ」
「●。●」